
ミラーワールド 真実を探す対立心

レー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミラーワールド 真実を探す対立心

【コード】

N9302X

【作者名】

レー

【あらすじ】

ミラーワールド紹介を読まないと思いません。

魔法が存在する世界で研究所の助手をしていた少年はイーグルズという組織の争いに巻き込まれてしまう。さて、どうなる事か。

ミラーワールド 1話

ハール

『はじめまして、私はクラウ・ハールという者です。かつて、イークルズによる黒族戦争によって差別の時代は終わり、そして激動の時代が始まった。戦争は英雄バグドル・ヤイバが終わらせつかの間の平和。しかし、今は激動の時代という事を忘れてはいけませんよ。ここはミラーワールドの世界の一つ、世界リプダクだ。リイユウが造りだしたこの世界には変わった黒族がいる。様子を見て見ようか。』

リイユウ

『プラネン来てください、頼みがあります』

プラネン

『何だよリイユウ？呼びだしなんて』

リイユウの呼びだす時なんて厄介事があるに違いない、しかも本人はこちらが困るのを楽しんでいる。あいつほど捻くれた奴なんて見たことがない。

リイユウ

『悪口を考える暇があれば助手として仕事しようか？』

笑顔怖い。

だが仕方ない、記憶喪失の所を拾われて現在リイユウの研究所で助手をしているからな。研究の内容は知らないな、何をしてるんだろっ？

リイユウ

『さて、世界ダルミトへ行ってジダイガから呪文の本持ってきてもらおうか』

プラネン

『何だよ？リイユウは呪文なんて必要無いだろ？あの無理矢理な方法があるんだから』

呪文は使うために何か詠唱が必要でタイムロスが酷い、呪文書には詠唱の言葉が書いてあるが、リイユウは詠唱自体を書き換える事が出来るから本なんて必要ない。

リイユウ

『大丈夫、サポートを連れて来たからな』

話聞いた？そしてサポート？やな予感。

リケ

『やー、プラネン少々だねー』

プラネン

『何でこいつ？仲間どころか敵増やすの？』

こいつはポイズン・リケだ、黒族の対極の種族である羽族だ、羽族は背中に翼が生えていて光の力を纏っている。黒族は羽族に触れると光によって身体を崩壊させてしまう。まあ、灰になってもそのうち再生するから命に別状は無いけど

リケ

『ええ？敵ー。あーなるほどー、以前人体解剖の実験体にしたの怒

「つてるー？」

プラネン

「当たり前だ、お前常識あんの？死ぬほど痛かったぞ、死なないけど」

そう、死なない。黒族であるため物理的では何をしても死なない。もちろん、痛みはあるけど

リケ

「大丈夫だよー、黒族死なない。ほらー常識あるー。次は風穴開けたげるねー」

もう、何処にとは聞かまい。大体予想がつく。

こいつは他人を脅す様な会話をする事が多い、全く何なんだよ

リイユウ

「仲直りは済んだようですね？ダルミトへの鏡を持って来ましたよ」

リイユウはダルミトへ続く鏡を持ってくるが、帰りは？そして老いぼれて仲直りに見えたのかよ。

リイユウ

「帰りに必要なリプダクへの鏡は向こうで探さない。そして、プラネン？乱暴な口調ですね？」

ああ、やばいかも。

それと、鏡を通して移動するため移動に使った鏡はその世界に置きっぱなしになる、だからそこら辺に鏡が落ちている事が時折ある。

リケ

『じゃー行くところねー』

待ってよ、向こうで鏡探すなんて無理じゃね？引つ張るなよ、え？
本当に行くの？帰りは？オーイ

ハール

『鏡の中に消えて行ってしまった二人、無事に帰って来られるのか？』

リアルワールド 外伝

幸明

『あっはっは』

何だ？急に幸明が笑い出した。大丈夫か？

悠一

『幸明どうした？』

幸明

『だってさ、三人の天才の内二人が一つの部屋にいるんだよ？なにやりだすかわかんないじゃん』

悠一

『私の技術は弱者のためだ、悪意などいらぬ。人と人に差など存在しない！』

幸明

『わかったよ、電気技術の天才幸明はあんたを手伝うよ』

悠一

『はあ、まあいい。もう少しで転送装置ダークミストアートの完成だ』

そしてこの日を境に一人は行方不明となった。

ミラーワールド 2話

ハール

『ダルミトへ着いた二人に待ち受けるものは一体なんだろうね?』

黒い霧のせいで世界ダルミトは見通しが悪い。ジダイガめこの世界の管理者なら仕事しろよ。

リケ

『暗いよー、闇の力であふれる世界なんて邪魔だー』

プラネン

『うるさい。文句ならジダイガに言え』

ん?何かやってきたな

ペール

『カカカ、キャクジンカ。ハタシハ、ドグ・ペール』

目の前に木の人形がいる。あれは、ジダイガの部下のペールか。あいつは操作術で糸を操る事が出来る。そういえば、本人に会ったことないな?いつも人形を操作しているのか?

ペール

『オマエハ、プラネンカ。ヒサビサダナ』

プラネン

『ジダイガに会いたいんだけど?』

ペール

『ハナシハキイテイル、カカカ、オイカエスヨウニナ』

なんでだよ。まあいいや、こいつを退治すればいいのさ!

ペール

『イクゾ? 操作(首吊り自殺の貫き人形)』

両手に剣を持った人形が一体現れる。危なっかしいな。しかし、人形は動きが鈍い。

プラネン

『無駄だ!(対極剣)で切り刻んでやる』

対極剣を光属性に変化して人形を切ると同時に操作を解除。効率的だな。

ペール

『カカカ、ヤルナ操作(集団自殺の増殖人形)』

やばい、たくさんの人形が押し寄せてくる! やっぱり命令を出してあの人形をやっつけとけばよかった。

プラネン

『とりあえず守りを固める! 光術』

リングバリア

光属性のバリアは物理攻撃に強いが、人形は疲れを知らず剣で切りつけている。まずい、バリアが持たないな。

リケ

『誰か無視してないー？ウインドブレード風魔法』

風の刃が人形を切りにこつちに向かってくる。ん？こつち？

グサリ

プラネン

『ギャー、首が取れたー！』

血の水溜まりが出来た。やっぱり敵だったのか？

ペール

『ココハヒクカ』

人形はその場で倒れて動かなくなった。のはいいが、どうするよ矢
血状態だよ？

リケ

『さっさと再生しろー、どうせ無事だろー』

プラネン

『ひでえ』

とりあえず、ホラーだから落ちた頭を拾って首の上に乗っけるとく
つつき始めた。

プラネン

『おまえな、謝るとかないのか？』

リケ

『え？プラネン怪我してないよー、謝る理由わかんないー』

確かに怪我は既に治ってる、だが痛い、何故それがわからないんだ！

リケ

『はいはい、黒幕さんのお出ましたよー』

黒い服の目つきがとてつもなく悪いジダイガさんあらわる。

プラネン

『やっぱりお前が黒幕か！』

ジダイガ

『黒幕？なんの話だ？』

プラネン

『なんで呪文書を渡そうとしない！ペールに護らせて明らかにこうなるとわかってたたる！』

ジダイガ

『灯台もと暗し、真実は貴様らと？』

何言ってるんだこいつは、いみわからん。

ジダイガ

『信用出来るのか？リイユウを？』

プラネン

『確かにあいつはやばい奴だけど』

裏でとんでもない実験をしているのは知っている。ガルド・クロリアは心配するなと言ってたけど。

ジダイガ

『分からないか？見えないだろう。善や悪など』

リケ

『結局何が言いたいのさ』

ジダイガ

『この時代力が必要さ』

リケ

『それならさー、骨抜きにして鍋にぶち込んで煮立てやろうか？』

ジダイガ

『なかなかの虚栄心だ。いや、恐怖心か？』

リケ

『知らないねー、あんたの内臓を目の前で切り裂いてやろうか？』

ジダイガ

『怖いだろ？自らを蝕む呪いが、羽族の守りが無ければ既にこの世にいないのだからな』

リケ

『証拠なんてないよ』

ジダイガ

『何故羽族の守りを風属性に変換させているのだ？守りが壊れると困るのだから？そして呪いの気配がする』

リケ

『・・・』

リケにかかっている呪いはよくわからないが解いてはいけないらしいな。でもなんで呪いとあの言動の関連があるんだ？まあいいや。

プラネン

『めんどくさい！お前を倒せばいいんだろ！』

ジダイガ

『クク、足搔いてみる。現実と幻想の区別出来ぬ者よ』

ハール

『強敵ジダイガを倒すことは出来るのか？楽しみだね？』

ミラーワールド 3話

ハール

『さてと、ジダイガには見つかりたくないから、そろそろ離れるか。』

ジダイガ

『どうした？かかって来ないのか？』

明らかにリケの様子がおかしい。傍若無人の魔法使い二人目がここまで静かなのは不自然だ。一応一人目は勿論リユウだけだな。

プラネン

『お前を倒せばいいんだろ、単純じゃないか』

仕方ない（対極剣）を構えておくか。

ジダイガ

『幻影（二重人格の犯罪者）幻影（偽りの暗殺）さあどする？』

ん？一瞬ジダイガの姿がぶれた？きのせいかな。ジダイガは四本の剣を取り出したな、あれはジダイガの剣（四羽刺翼）だ。長い鎖のついた細身の剣でよく剣自体を投げて使ってる。まあ鎖を引っ張れば手元に戻って来るから便利なのか？まあいいや、相手が剣ならやることは一つ。

プラネン

『こっちも剣で戦うのみだ！』

先手必勝だ、向こうに向かって剣を振り回す。(対極剣)は大きめだから、四本あっても細身の(四羽刺翼)では防ぎきれないはずだ。と思ってたけど、ジダイガは後ろに飛びのいて空振り。おしい。

ジダイガ

『次はこちらだな。幻影(百の剣四の死体)』

ジダイガの剣がみるみる増えて、たくさんになった。これでどうするの? ああ、投げてきたよ。全部一気に、なにやってんの、あぶないだろ。

グサツ グサツ グサツ

プラネン

『ギャー!』

数が多過ぎて避けきれない。意識が朦朧としてくる。でも、剣が増える? ありえなくね?

プラネン

『もしかして、^{ライト}光魔法』

辺りを光で照らすとたくさんの剣は消えジダイガの手元に四本だけ残った。ついでに自分自身を見ると怪我もしていない、あれ? 痛かったよな?

プラネン

『あれでダメなら魔法はどうだ! ^{ブラックハード}闇魔法』

黒い光線がジダイガへ一直線！このスピードなら避けられないだろ！

ジダイガ

『闇を使うなど愚かだ。操作（漆黒の墮神との契約）』

あれ？ブラックハードが向きを変えてこっち来た！

プラネン

『来るんじゃない！調和術（孤独の恐怖による破壊への対立心）』

ブラックハードは破壊を拒絶する力により逸れて関係ない所にぶつかった。

プラネン

『危なかった』

ジダイガ

『プラネン、私の闇を操る力の事忘れてたな？油断大敵だ、幻影（死の鳥飛ぶ鳥）』

ジダイガは自分の左腕を切り落とした。馬鹿なの？左腕は剣を握つたまま落ちて消え、ジダイガの左腕は再生した。何がしたかったの？

プラネン

『意味わかんねー、ウェイブ剣技』

衝撃波がジダイガへ一直線、ここであいつはあれを使うはずだ。

ジダイガ

『その程度か、ブラックハード闇魔法』

衝撃波は闇の光線に掻き消されるが、予想どおり！

ブラネン

『引つ掛かったな！ライトヴァイン光魔法』

闇の光線と光の光線がぶつかり合う。ここまで予想どおり！

ブラネン

『終わりだジダイガ！リングバリア光術調和術（いがみ合う属性対立心）』

闇と光は反発し辺りを破壊しまくる。こっちはバリア張ってるから平気なのさ、ジダイガお前の負けだ。

ドカーン。

反発力って凄いな、土煙で見えないだろうが。

ジダイガ

『ディークル闇属技』

何？ジダイガは爆発に巻き込まれて重症なはず、そもそも光の力も受けたはずだからすぐに再生も出来ないはずだ。

ヒュウ

剣を持った左腕がこっちに突っ込んできた。光術では相性悪くて防ぎきれないし、調和術では近すぎて意味がない。

プラネン

『ああそうだ、これがあつたな。(サーヴェルドブック)』

サーヴェルドブックでジダイガの左腕を叩き落とし、(対立剣)で切り裂く。さすが神の本だ絶対に破けないのは本当だな。

プラネン

『切り落とした腕が今更襲ってくるとか反則だろ』

切り落とした腕の操作なんてどうやれば出来るんだろ。リユウに聞こうかな。

リケ

『ビミョーじゃない？ジダイガ？』

ジダイガ

『そうだな、リケ。私はプラネンがテルトスを倒す事は出来ないと推定する』

え？何この二人。後ろを振り向くと何事もなかったかのようにリケとジダイガが話をしている。

プラネン

『結局何なんだ！』

リケ

『馬鹿だなー、リユウのテストだよ。プラネンはジダイガの幻影と戦ってたのー』

ジダイガ

『幻影（二重人格の犯罪者）は私の幻影を造るため、幻影（偽りの暗殺）は幻影の痛みを与えるためだ。注意不足に知識欠落。貴様はその程度か』

ブラネン

『ひでえ評価』

リケ

『ブラネンが馬鹿なせいでこっちも酷いこと言われたんだからねー』

ブラネン

『呪いのことは関係無いだろ』

リケ

『八つ当たりは決定だー』

ブラネン

『なにそれ、八つ当たりの自覚あり？』

ジダイガの方向を見るとあいつはニヤリと笑いやがった。確信犯だ。なんで周りには傍若無人な捻くれ者が多いのか。

ジダイガ

『イークルズが動き始めているのは知っているな？問題とされているのはテルトスだがあいつはあらゆる攻撃が効かない』

ブラネン

『なにそれ無敵？』

リケ

『破壊の力を触れたただけで消してるんだよねー。しかも、こっちはテルトスに触られただけで、さよーならー』

ジダイガ

『テルトスは触れた物を消す事が出来る、そのためか奴は常に浮いている。つまり無自覚な力だと予測される』

リケ

『テルトスもー魔力変換体質だしねー』

プラネン

『結局どうやって倒すんだよ？』

はつきり言ってそんな怪物と敵対したくない。なんで倒す話になつてんだろ？

ジダイガ

『テルトスはイークルズの一人であるため、どんな行動に出るか分からない。いざという時にはプラネンの対立心を強める能力で無理矢理テルトスを切る方法があるのだが』

リケ

『残念ープラネンは雑魚だったー』

プラネン

『何だよそれ、知らない内に巻き込んで』

ジダイガ

『まあいい、テルトスは私が何とかする。貴様らは帰れ』

納得がいかない、いつか絶対ジダイガお前を倒す。

リケ

『鏡無いよー』

ジダイガ

『世界イエロザの鏡ならあるが?』

リケ

『それでいいやー』

プラネン

『いや、良くない』

帰れないよ?しかもイエロザは砂漠だよ?何しに行くの?

リケ

『プラネンのお家探しの旅にレッツゴー!』

プラネン

『何だそれ!』

ハール

『そんなこんなでイエロザに行く二人。そういえば、その後プラネンはリケに解体されてしまったらしいよ?』

リアルワールド 外伝2

美和

『ねえ路亜。あの二人どうなったのかしらねえ？』

路亜

『知りませんよ。行方不明になって数年経っているのですから生きてはいないでしょう』

美和

『いやあ、生きてるわよ。向こうの世界でねえ』

路亜

『向こうの世界？夢物語でしょう？』

美和

『あるのよ、向こうの世界、面白いわねえ。』

路亜

『美和さんにはついていけないです』

美和

『何言ってるのよ？路亜も行くのよお？』

路亜

『そつでじないですか』

美和

『面白いねえ、ミラーワールド。新しい研究が出来るかしらねえ。
アハハ』

ミラーワールド 4話

ハール

『砂漠です。ああ、そういえば昔。ムア・ダルアが完全な調和は調和ゆえに対立すらも内包する。なんて言っていたな。プラネンはトルヴェザと関わりがあるのか?』

プラネン

『砂漠じゃないか』

リケ

『砂漠だねー』

プラネン

『どつすんのね』

リケ

『知らなーい』

困る、何せ砂漠と近くに巨大な木造の船が放置されているだけ。どうしろと?」

ガサツ ガサツ

誰がいるな?このあたりに住んでいるとすればあいつしかいないだろ。」

プラネン

『オーイ。デューンこつち来い』

デューン

『ひあ！プラネン。リユウいないよね？』

プラネン

『いないから大丈夫だ』

リケ

『誰ーそいつ』

リケは初めて会ったんか、そりゃ警戒するな。全身ローブで隠しているんだから。

プラネン

『デューンはテールだ』

リケ

『へーテールかー』

リケを見てビビるデューン、以前リユウに捕まってから更に臆病になったな？そういえば、テールは竜人と呼ばれると機嫌が悪くなる。理由？知らん。

リケ

『テールの装甲ってさー現在見つかっている物質の中で最も固いんだよねー？』

デューン

『僕知らないよ、この人怖い』

プラネン

『仕方ないよ、リケは凶悪魔導士だから』

リケ

『ヘルウインドウインドブレイサアア
風魔法風魔法火魔法』

バコーン

ザキッ

ドカーン

一割ぐらいは冗談だったのに。ヘルウインドで吹っ飛ばされ、ウインドブレードでミンチになり、ファイアで爆破、最悪だ。

リケ

『プラネンの言う事信じちゃだめだよー』

デューン

『・・・僕プラネン助け行ってくる』

いや、大丈夫だから。それに、デューンお前足元おぼつかないぞ？ ああ転んだ。相当怖かったんだな。しかしリケお前には復讐だ！

プラネン

『ブラックハード
覚悟しろリケ！闇魔法』

風属性の羽族の守りによって、ブラックハードは逸れた。ああ、そうだった。

リケ

『あははー、プラネン?』

30分後

プラネン

『ひでえ』

デューン

『怖いよ怖いよ』

デューン少し泣いてないか?これ以上リケに関わるなどか言っとくか?

リケ

『結局どうするか?』

バキューン

うわっいきなり銃撃だと!こんな事するやつは決まってる。

ギランダ

『ハッハッハー。ギランダ参上!』

プラネン

『うぜえ!』

ゴツン

イライラして殴ってしまったのはしかたない。こいつは、レイ・ギランダ。魔法がろくに使えない魔族だ。ん?気絶してるな。

プラネン

『大丈夫か？ギランダ』

ギランダ

『ハッ、俺を倒すとはなかなかだな。しかし、これならどうだ。』

ギランダは高くジャンプ、空中を舞いながら銃撃乱射。なにあの身体能力。人間技じゃないだろ。

リケ

『ねーデューン。翼広げてー』

デューン

『わかつたりケ、僕やる』

デューンが翼を広げると、ほぼ全ての銃撃が翼で弾かれた。なるほど、リケ頭いいな。

ギランダ

『ハアハア、まいったか！』

明らかにまいつているのはギランダだ。黒族は不老不死だから暑さはあまり関係ない、リケは羽族で羽族の守りによって暑さは緩和される。デューンはそもそも温度を感じることが出来ない。

プラネン

『いい加減止めたらどうだ？ここは砂漠だぞ、暑さで体力が限界なんじゃないの？』

リケ

『人が住むには過酷過ぎだねー』

デューン

『僕ここ雨降らない住みやすいよ?』

ギランダ

『今日は引いてやる!リユウの所に行かないとだからな!』

ギランダは鏡を取り出し、鏡の中に入って行った。もしかして、あの鏡で帰れるのか!?

リケ

『残念ー、世界ユアタウの鏡だよー』

プラネン

『なんで?まあいいや、砂漠よりましだろ』

リケ

『じゃー行くかー。コールドなら鏡持つてるかもしれないしねー』

デューン

『僕残る、バイバイ。』

ハール

『あの二人、いつになったら帰れるのか?』

ミラーワールド 人物

セイ・プラネン

種族 黒族

属性 闇 光

能力 対立心の強化

ポイズン・リケ

種族 羽族

属性 光 風

能力 属性変換

セイ・リイユウ

種族 黒族

属性 闇

能力 印を使える

クラウ・ハール

種族 魔族

属性 魔力

能力 死体を操る

バグドル・ヤイバ

種族 ?

属性 ?

能力 武具を作る

ドグ・ペール

種族 ?

属性 魔力？
能力 糸を操る

セイ・ジダイガ

種族 黒族

属性 闇

能力 幻を見せ現実を分からなくする。

ラウル・デューン

種族 テール

属性 無い

能力 無い？

レイ・ギランダ

種族 魔族

属性 雷

能力 少しでも機械を扱える

ミラーワールド 5話

ハール

『さて、ワールドが管理する世界ユアタウに着いたわけだけど、ヤバイ奴がいるな』

リケ

『ユアタウに着いたー』

プラネン

『とりあえずワールドの所へいくんだろ？』

リケ

『そうだねーとりあえずはー。あれ？町の一部が消滅してる？』

ここからでは良く見えないが確かに町の一部が消滅してる、なんなんだよー一体。

リケ

『急ぐよプラネン！ワールドー一体なにやってんの、これ以上被害を大きくするなら解体してやる！』

プラネン

『物騒だな、仕方ねえ急ぐか』

町に辿り着くと悲惨な光景だ、町の一部が消滅しクレーターのよう
に地面がへっこんでる。

リケ

『へっこんでる所にコールドと誰かがいるよ』

本当だ、コールドが弓を構えて明らかにもう一人を警戒してる、もう一人の方は明らかに空中を歩いている。ん？、まさか。

プラネン

『あいつがテルトスじゃないか？』

リケ

『うわーどうすんのー』

コールド

『テルトス今すぐに立ち去れ』

テルトス

『いや、その前に新たな客人に挨拶をしようか。はじめまして私はワー・テルトス、イークルズの一人だよろしく』

あんまりよろしくしたくないんだけど・・・

コールド

『立ち去らないならば攻撃を開始する』

テルトス

『お前とは話しがうまくいかないようだな』

コールド

『アイスネーク攻撃開始。召喚』

ピューン！ ピューン！

攻撃は弓を放ちながら召喚した氷の蛇に突撃をさせるが、全ての攻撃はテルトスに触れると消滅してしまった。

テルトス

『無駄だ、どんな攻撃も効かない』

コールド

『作戦変更、体温低下による身体能力の破損を狙う。召喚氷魔法』

アイストミガフリーズ

ビュオー

召喚した氷の壁と吹雪で寒い。さすがコールドだな。

テルトス

『やはり、実力者は厄介だ。虚撃』

ロストストーン

テルトスは奇妙な石を作りアイストーンにぶつけると両方が消滅した、まじでか。

リケ

『ええ！虚撃！禁忌だよ。使用者の精神を歪める力、使いすぎると大変な事になるよ！』

なにそれ初めて聞いた

コールド

『虚撃による反物質の創造、守りを必須とし作戦を続行する、光術』

グロースバリア

リケ

『コールド危ないよ、加勢するよ。風魔法』トルネイド

ビュオーー

風の竜巻が現れて更に吹雪が強くなったな、よし、こちらも加勢するか！

ブラネン

『テルトス覚悟しろ闇魔法』ブラックハード

テルトス

『愚かしいな、虚撃』ロストワールド

テルトスの周りに奇妙な波動のようなのができて周りにあった物を消滅させた。

テルトス

『ポイズン・リケ。イーグルズの仲間にならないか？』

リケ

『やだね、何で町を消滅させた奴の仲間になるのさ、断じてやだ』

テルトス

『私達イーグルズの組織の大きさを知らしめるための事だ、これでイーグルズの噂は広がるだろう』

リケ

『知らないね、魔法』ラーサ

リケは魔力の塊をテルトスに放つ

テルトス

『マジックバリア
光術残念だ』

あれ？なんでバリアで攻撃を守るんだろ？

リケ

『アハハ、わかつちやった！当たり前だよね精神に影響する魔力属性を反物質で防げるわけないもんね！マジックソード魔法』

リケさすがだ、これでテルトス倒せるじゃないか！
リケは魔力で作った剣を構える

テルトス

『マジックアウト
勝ったと思うか？魔法』

テルトスはマジックアウトでリケの魔法を消すのか？

コールド

『避けるリケ！』

リケ

『え？』

マジックアウトはリケ自身に当たった。ヤバイ、羽族の守りが解除される！

リケ

『う・・・あ・・・ゴホ』

リケは大量に血を吐いて痙攣している、このままじゃ、とりあえずリケの魂を身体に留める。

プラネン

『調和術（留まる復讐あの世からの対立心）』

コールド

リターナヒール
『光術』

治療はコールドに任せるしかないな、テルトスと一対一か。

テルトス

『セイ・プラネン。イークルズの仲間にならないか？』

プラネン

『なるかよ！そんなの』

テルトス

『町の心配をしているのか？大丈夫だ、あそこに住んでいた人々は既に避難している』

プラネン

『え？無事なのか？』

テルトス

『当たり前だ、イークルズが目指すものは完全な平等だからな』

プラネン

『黒族差別なんて昔話だろ』

テルトス

『今現在、差別が完全に無いと言い切れるか？黒族に排他的な世界など所々にあるし新種族達は引きこもりになっている。だから、イクルズは巨大な組織になった』

プラネン

『・・・』

テルトス

『イクルズに入るなら、過去の記憶を探す手伝いもしてやる。記憶喪失なんだから？』

プラネン

『何でそれを？』

テルトス

『さあな？どうする。共に完全な平等を手に入れよう、神は人に差を付けはしない全てが対等だ』

どうすればいいんだよ！

頭がゴチャゴチャになってくる。

ジダイガ

『惑わされるな、プラネン』

えーと、何でジダイガいるの？

プラネン

『ジダイガ、何で？』

ジダイガ

『テルトスは私が止める、貴様は帰れ』

テルトス

『ジダイガか。出来れば会いたくは無かった』

ジダイガ

『足掻いてみる、現実と幻想の区別つかぬ者よ。操作（空間の墮神との契約）』

空間が割れて狭間に落とされる！ジダイガの方を見ると二対の黒い翼が見えた様な気がする。

そして、落ちた先は世界リプダクだった。

ハール

『さて、そろそろ出番かな？あいつが自分の過去を知ったらどうなるんだろうね、楽しみだな』

イークルズ

テルトス視点

キラー

『テルトス、ユアタウはどうでした？』

テルトス

『キラー様、作戦は良好です。しかし裏をリロードに任せて大丈夫でしょうか？』

キラー

『リロードなら大丈夫だろう、ダークミストアートの使い方も教えてある』

テルトス

『了解しました』

キラー様は機械の修復のために別の部屋へ向かって行った。

テルトス

『フレイ・ストグ。ヘラ・ハカ。レイ・バルグ。こちらに来なさい』

ストグ

『テルトスさん！ユアタウで暴れたんだって？俺にも行かせるよ！』

ハカ

『ストグうるさい』

バルグ

『・・・』

三人とも実力者のはずだが、これでは・・・

テルトス

『ストグ、私たちは困である事を忘れてはいけません、極力被害は出さなくてももらいたい』

ストグ

『テルトスさん、わかってるさ。いくぜ！』

ハカ

『テルトス様、我はストグのストッパーとなりましょう』

ストグとハカは一緒に行動するのが、ハカ頑張ってくれ。

バルグ

『テルトス。俺は個人で行動する』

テルトス

『無意味な復讐は止めなさい、いつまでも終わりませんよ』

バルグ

『テルトスには関係ない』

バルグ、何故解らないのですか。復讐は復讐しか呼びませんよ。悲しいだけなのに。

床を見るとキラー様が落としたリアルワールドの言葉で書かれた古い本が落ちていた。確か名前は新約聖書と言っていたはずだ、キラー様が話してくれた覚えていた人も少ないリアルワールドの昔話、差別なく人を助け十字架に磔にされ殺された聖者の話し。私は世界に敵対されてもキラー様に着いていく。

ミラーワールド 6話

ハール

『プラネン起きなよ』

プラネン

『うっ、痛い』

起きると目の前には知らない人、ではなく知らない死体が？ええ！

ハール

『プラネン君、この世界を壊さないか？』

プラネン

『誰だよ、馬鹿なの？』

リプダクを壊してどうするのさ？

ハール

『ハールだよ。ミラーワールドを壊そうよ、こんな不安定な世界なんていらんよ』

周りを見渡してみる、草原と研究所しかない、箱の中の様な世界。

ハール

『リアルワールドは風が吹き、天候があり、夜や朝というものがある。ミラーワールドにはないものだ。時間の流れがない世界なんてただの粗悪品だよ』

プラネン

『時間のながれ？』

この世界リプダクは常に明るい、他の世界も差はあるものの全てが時間の流れを感じない。

ハール

『この世界はなんて寂しいんだ、普段はプラネンとリイユウしか住んでいない』

世界リプダクはリイユウが戦争を逃れるために作った世界。リイユウが拾ってくれて今はここに住んでいるがその前は一人だったんだろっか

ハール

『世界は滅ぶ運命を背負い生まれる。だがこの世界の終焉をムアは預言しなかった』

プラネン

『終焉？よくわからない』

ハール

『リイユウに拾われる前の記憶がないんだよね？ロトユ・サーヴェルドを捜しなよ』

ハールはいつのまにか居なくなっていた。

リイユウ

『プラネンさっさと来なさい』

ああ、リイユウが呼んでる。後で考えればいいか

プラネン

『わかったよ、今行く』

研究所まではせいぜい5分、この世界は端から端まで行くのに1時間ぐらいしかかからない、知っている中で一番大きな世界はイエロザで端から端までが8時間ぐらいかな？因みに端まで行っても反対側の端に来てしまう、何もない虚無の空間に落ちないようにするための対策で世界を作る時は必ず設定しないと危ないんだとき。世界は特別な鏡に神の言葉を書き込む事で作れるらしいがわからん。作った世界の鏡は弄られ無いように隠しておいて、その世界に入るのには世界の鏡のコピーを使うから世界そのものを改造できないらしい。

リイユウ

『何を考えている？ああそうだ、リケはコールドが治療している、ジダイガはテルトスを追い払ったらしい』

プラネン

『そうなんだ、一見落着だな』

リイユウ

『まだですよ？』

プラネン

『まだかよ』

とりあえず研究所に到着、扉を開くと猫と狼が。

リイユウ

『拾いました』

プラネン

『へー、名前は？』

リイユウ

『・・・まだですよ』

プラネン

『やっぱり』

リイユウ

『狼は・・・ウルフ』

プラネン

『そのまんま！』

リイユウ

『猫はキャ』

プラネン

『それ以上言わせねえ！』

リイユウ

『キャか・・・』

プラネン

『いや、駄目だろ！』

猫をみると尻尾が / みたいになっている。

リイユウ

『名前はルートだ』

プラネン

『もついいよ』

とりあえず部屋に戻って考える。イークルズは昔差別されている黒族を助けるためと言いホワイトレッグという羽族主義の組織と戦争。ホワイトレッグを倒し大きな被害を出した、イークルズはその後も被害を広げたためヤイバによって壊滅したはずらしい。記憶がないから詳しくはわからないが争うのは人々をまとめる人間がいないからだと思う。イークルズを倒して平和を手に入れよう。まずはそこからだ。

ミラーワールド 7話

プラネン

『暇だ』

やることが無い、リユウは化学実験？とやらをしている。なんか液体みたいなのを混ぜてた。

気がつくとも目の前に黒いローブを着た謎の人物がいる。

サーヴェルド

『サーヴェルドだ、いきなりで悪いがサーヴェルドブックを返して欲しい』

プラネン

『返せるなら返してやるよ、この本気がつくとも手元にあるからな』

実際にサーヴェルドブックをどこにしまっても捨ててもいつのまにか手元にある、気がついた頃からずっとこの本を持っている。

サーヴェルド

『記憶がないのか？ならばしかたない。もし思い出したら決断するんだろうな。一つだけ教えてやるう、プラネンお前は、生き物ではないのさ、我と同じような存在だ。世界の図書館で待っているぞ』

サーヴェルドはその場で消えてしまった。生き物ですらない？何を言いたかったんだらう。

草原にねっころがると何も無い空が見える。小さな少年が研究所の方へ走っている。相変わらず白髪混じりだな、ようやくここまで来たかガルド・リバーシア。止めとけばいいのに……

リバーシア

『リイユウ！クロリア姉さんを解放しろ！』

リイユウ

『クロリアには実験の手伝いをしてもらってるんですよ』

リバーシア

『嘘つくな！調和術（我が身の影と他人の影）』

範囲内の影を実態化する調和術か、無駄なのに。

リイユウ

『いい加減にしましょうね。向こうに行きなさい、オリジナル呪文00番』

リバーシアの姿は消えた。リイユウは普通に話しをしているように見せて実は呪文の無理矢理な改ざんをして発動させた。最後のオリジナル呪文00番は改ざんしたときのお約束らしい。改ざんは莫大な魔力を使い、更に改ざんしてもすぐに元の言葉に戻ってしまった。め効率が悪い。リイユウだからこそ出来る芸当だ。

リイユウ

『新しい実験体が入ったな』

リイユウはニヤリと笑い研究所へ入って行った。既にリイユウはまともではないな、長く生きた黒族は段々とまともではなくなると言

うのは本当なのか？

リイユウ

『プラネン、あなたも実験体になりたいですか？』

プラネン

『やめろ！』

リイユウはいつも笑顔だが内心怒ってるな。人の心が読めるのかな？まあいいか。

ミラーワールド 8話

プラネン

『最近暇だな、イークルズもないし』

最近イークルズが何かをしているという話しを聞かない、ジダイ
ガがなんかしたのか？

リイユウ

『暇そうですね、プラネン』

プラネン

『確かに暇だ』

リイユウ

『では、少し勉強をしましょうね』

プラネン

『めんどくさい』

勉強するくらいなら草原でねっころがってたほうが何倍もいい。

リイユウ

『プラネン？あなたはバカなのですから少しくらい勉強しましょう
ね？』

リイユウは杖で地面に印を描きはじめた。たしかそれは束縛の印じ
やないか。

ブラネン

『わかったから、止めてくれ』

リイユウ

『わかればいいのです。まあ、勉強とは言っても昔話について考えてもらうだけですから大丈夫』

ブラネン

『何だよ、昔話って』

リイユウ

『墮神の神話ですよ』

ブラネン

『あー、聞いたことあるな』

リイユウ

『ある時、世界に反逆した神は墮ちて墮神となりました。墮神は自分の世界を創り出しその世界を治めていました。しかし絶対神はこれを許さず世界の力を借りて墮神の世界の時間を止めてしまいました。』

ブラネン

『ああ、たしか。時に拒絶されし世界だっけ？』

リイユウ

『そうです、時を止めてその世界を住民ごと封印しようとしたのです。しかし、墮神の仲間に共鳴の預言者がいたのです。預言者は全てを知り封印される前に世界を二つに分断し片方に住民を避難させ見つからない場所に転送したため絶対神は見つける事はできなかつ

た
』

プラネン

『えーと、それが存在しなかった世界だよな？』

リイユウ

『そうですね、それが墮神の神話の要約です』

プラネン

『へー、だから？』

リイユウ

『印術（五亡星の束縛）リバー闇魔法』

ガラガラドカーン

リイユウは印を完成させ動きを封じたあと闇の雷を呼び出しぶつけやがった。うわー痛てー。

プラネン

『何すんだ！』

リイユウ

『やっぱりバカですか？この神話が事実かどうかで他の世界の存在を確認出来るのですよ』

プラネン

『謎の二つの世界か、でも結局神話だろ？』

リイユウ

『共鳴の預言者の預言のかけらが残っているのですよ』

プラネン

『あー、面倒だ』

リイユウ

『相変わらずですね』

リイユウは研究所へ歩いて行った。預言のかけらか、共鳴の預言者は化け物だという話を聞いたことがあるな。

バキツ

プラネン

『いてえ！』

後ろを見るとギランダが飛び蹴りを仕掛けていた。

ギランダ

『ハッハッハ。プラネン敗れたり！』

プラネン

『毎度毎度突っ掛かってくるな！ブラックハード闇魔法』

ギランダは空中に高くジャンプして避けやがった。しかも、空中を舞いながら銃を乱射。

ギランダ

『俺を簡単に倒せると思うなよ！』

銃なんて珍しい武器使いやがって、そういえば魔法使いは銃を使えないらしいな、魔法の力は法則や現実を歪めるから機械とは相性が悪いらしい。ギランダはほとんど魔力を持たないから機械を扱えるらしい。

リイユウ

『いい加減にしましょうか？喧嘩両成敗です。闇魔法^{ダイクケラウンド}×100』

その後の事はノーコメント。

ミラーワールド 9話

プラネン

『ああ、酷いめにあつた』

ギランダは既に帰つたようだ、凄い回復力だな。

空間にひび割れが出来その隙間からあの人物が。

ジダイガ

『プラネン貴様は暇そうだな』

プラネン

『暇だよ、イークルズも出てこないしさ』

ジダイガ

『能の無い輩め、まあいい貴様は撒き餌を必死に追いかけていればいいさ』

ジダイガは言いたい事だけ言うと空間に穴を空けてダルミトへ帰つた。いつもあいつは規格外な奴だよな。

ジダイガは闇と空間を自在に操作する事が出来る。リユウ曰くあれは操作ではなく支配らしいが違いが解らない。

ストグ

『お前がプラネンだな？フレイ・ストグだ』

プラネン

『何しにきたん？』

いつの間にかいたストグという人物。

ストグ

『もちろん正々堂々と勝負だ！』

プラネン

『めんどくさい』

何こいつ？ギランダ並の戦闘狂か？

ストグ

『きくみみなんて持たねえぜ？岩属技（岩龍崩拳）』

ストグは地面を殴ると地割れを作り出した。

プラネン

『調和術（人間の欲望大地からの対立心）』

地面と対立して空中に浮く事で地割れを回避、すぐさまストグはこ
つちに殴りかかってくる。

ストグ

『岩属技（岩龍壁拳）』

プラネン

『接近させるか！ブラックハード闇魔法』

ストグめこれなら避けられ無いだろ。

ストグは避けようともせずブラックハードを拳で受け止める、冗談じゃないよ。

ストグ

『グオー！返してやるぜくらえ！岩属技（岩龍裂拳）』

ストグはブラックハードを殴って打ち消し衝撃波を飛ばしてきた。まずいな。

リイユウ

『印術（三亡星の祝福）』

衝撃波は印の守りによって打ち消された。リイユウタイミングバツチリだ。

プラネン

『助かった。いくぜリイユウ！』

リイユウ

『私の世界に無断で入って来るとは、礼儀知らずですね。印術（六亡星の呪縛）』

ストグ

『グアー！』

呪縛によって身動きが出来ないストグ、苦しそうだ。

リイユウ

『さてと、次はどうしましょうか？』

ガシャーン

プラネン

『一体なんだ！』

細長い瓶の様な物がぶつかって来たと思えば、瓶は割れて液体が飛び散った。その液体に触れたものは凍ってる。

ハカ

『我はヘラ・ハカ。ストグよ何故我の忠告を聞かぬ』

ストグはまだ呪縛に捕まっている。ハカは細い瓶を何本か取り出し投げてくる。

プラネン

『うわ、冷てえ！』

身体が凍りついて自由がきかなくなっている。何だよ連続でピンチ。

ハカ

『黒族は自由を奪う事で再生能力を無効化する』

ハカは更に瓶を投げってくる、これ以上はヤバい。（対極剣）で瓶を切り裂く。と、瓶が割れて液体が直にかかる。割れたら意味なかった！

リイユウ

『バカですね・・・印術（九亡星の時間）印術（八亡星の印）』

九亡星の時間で氷の溶ける時間を早める、八亡星の印を所々に描き魔法のターゲットにする。リイユウ無茶苦茶だ。

ハカは辺り一面に八亡星の印があるため自由に動けずにいるな、印の上に移動した瞬間にやられるからそりゃあ慎重になるだろ。

ハカ

『リイユウよ、我の負けだ。しかし、イークルズはその願いを叶えるだろっ』

ハカは瓶を地面に落とすと瓶が割れて中から大量の煙りが出て来た。

ブラネン

『見えねえ』

煙りが晴れると二人の姿はなく鏡が落ちている。

リイユウ

『鏡で逃げましたか』

鏡は世界ロンハイズの鏡だな。あそこはあまり行きたくないが。

リイユウ

『察しがいいですね、行きなさい』

ブラネン

『わかったよ行けばいいんだろ！』

ロンハイズなんてあのイークルズの奴ら明らかに誘導してるだろ！

リイユウもわかってて送り込もうと・・・

プラネン

『帰りは？』

危ない危ない、鏡の中へ行く所だった。

リイユウ

『知りませんよ？』

リイユウは背中を蹴り飛ばして鏡の中に無理矢理突っ込みやがった。
おぼえてろよ！

ミラーワールド 10話

リード

『何故お前がここにいる！汚らわしい黒族め！』

プラネン

『知らねえよ、お前はおとなしく警備でもしてろ！』

現状確認、ロンハイズに着いた、まだ問題ない。目の前にトレイト・リードがいた、まだ大丈夫。リードがいきなり文句を言ってきた、なんだよ！

リード

『警備はしている！お前を追い払うためにな！』

プラネン

『あ？黒族差別なんて昔話をまだこだわるのか？古い奴だな！』

リード

『黒族差別ではない、何から何まで中途半端なお前が来る事が災いだ！』

プラネン

『知らねえ！誰が災いだ！』

リードは元々黒族を嫌う傾向があるが他の黒族にはここまで極端に行動に表す事はない。何これ？嫌われる理由が毎度ながら見当たらない。

リード

『お前が災いだ！さっさと帰れ！安定の時代の遺産を壊すな！』

思い出した、間違えて古い搭の一部を崩したんだった。この世界の管理者だから怒るのは当然かも知れないが、管理者なら管理しろ！この世界は黒族を嫌う傾向があるぞ！でも、もしかしたら管理者の影響かも知れない。

プラネン

『あー管理者だからか、でもさ、管理者がこうだからこの世界の人
は嫌みな人多いよな？』

リード

『お前が黒族だから悪い！』

プラネン

『は？好きで黒族やってる訳じゃねえ！人を外見で判断するな！』

リード

『お前の外見などただのガキだろうが』

外見を言うな15くらいに見えるかも知れないが成長が止まってるんだから結構長く生きてるはず。リイユウなんて外見20歳で実際は100歳を超えているらしい。

ジャック

『でもプラネンは頭がガキだと思うんだよね、僕はさ』

ファイバー

『ジャック、いきなりそれは失礼だろ』

近くを通りかかった二人はこっちに気づいて声をかけてくるが、ポイズン・ジャックお前は10歳程度の癖に生意気だ！でも、リケの弟だから仕方ないのか？そして、ポイズン・ファイバー。兄としてリケとジャックをどうにかしろ！コールドと違ってお前は頼れないけど。

リード

『二人とも、まずは挨拶ではないのか・・・』

リードはかなり飽きているが会った瞬間に文句を言っお前もどうなんだ？

ファイバー

『すみません、久しぶりですねリードさん』

ジャック

『でも、リードもプラネンに挨拶しなかったね？』

そうだ！ジャックお前が正しい！

リード

『ジャックさん、何を言っているんですか？頭の中が悪臭放っている！そんなこいつに挨拶なんていりません』

ジャック

『わかった、僕はリードの言った事理解したよ』

プラネン

『はあ?!納得いかねえ!』

リード

『そのままの意味です、おばかさん？』

リードお前を遙か遠くへ吹っ飛ばしてやるつか？

ファイバー

『まあまあ、リードさんもプラネンさんも落ち着いてくれないか？』

ジャック

『公共の場で喧嘩なんて、ダメだねー』

リード

『チツ！仕方ない』

プラネン

『あーうざかった』

後ろを振り向いてみると戦闘狂がこっちに向かって走っている。だから、うぜえ！

ストグ

『俺だ！プラネン今すぐ勝負！』

プラネン

『うぜえ！ブラックハード闇魔法』

リード

『ウインドブレード世界を荒らすな！風魔法』

ストグ

『ええ！卑怯者め！』

いきなり攻撃されたためどうする事も出来ないストグは、逃げ出した。

プラネン

『鏡で逃げるなんて卑怯だ！』

発動した魔法は止められない、ブラックハードは搭に激突して一部を崩壊させた。何かヤバくね？

ドカーン ガラガラー

恐る恐るリードの方をしてみる。

リード

『お前はよっぽど逮捕されたいようだな、サンダーペイン雷魔法』

リードは電気の塊を投げってきた、サンダーペインは当たった相手を痺れさせ動けなくする。さて、逃げるか！

リード

『待て逃げるな！』

嫌だね、ストグが使った鏡へ入って逃げる。逃げ道を作ってくれたストグに一応感謝。

ミラーワールド 11話

プラネン

『寒い』

ここは世界ヴァトウズ、海と海に浮かぶ巨大な氷しかない世界だ。
この世界に住んでいる人は一人しかいない、仕方ない会いに行くか。

プラネン

『ヘラ・ロットいるのか？』

とりあえず、氷で造られた家の前で呼んでみる。

ロット

『久しぶりですね、プラネンさん。これもまた神のお導きでしょうか』

プラネン

『いつも何でそうなる』

神と言うよりストグの導きだ、そもそも神なんているのか？

ロット

『神を信じなさい、あなたは救われます』

プラネン

『神が何をするってのさ』

ロット

『トルヴェザ様は調和で人々を救われます』

プラネン

『トルヴェザは封印で永遠の苦しみを与える神だと言う話を聞いたことがあるんだけど？』

ロット

『それは殺しを行わないための策なのですよ』

そっちの方が残酷だと思っただけ。

何も無い空が割れているまたあいつか・・・

ジダイガ

『トルヴェザは十字架で封印を行う神。イークルズにとっては皮肉だな』

ジダイガ、空中に立っている事についてはまだいい、何で逆さま？
頭から落ちたりしないの？

ロット

『神の反逆者よ、何しにここへ来た』

ジダイガ

『私は世界フェシオダが大変な事になっているとプラネンに伝えに来ただけだ』

ロット

『ならば去れ反逆者』

ジダイガ

『反逆者？何の事だ？』

ジダイガは考え込んでいる、本当にわからないようだ。

プラネン

『反逆者ってどうゆう意味？』

ロット

『知らない振りをして無駄ですよ？去らないなら、3、2』

ロットはジダイガを指差して数を数えている、何をするきだろ？

ロット

『1、0』

ドカーン！！

ジダイガの身体が爆発した！？ぐちゃぐちゃになったジダイガの死体は氷の上に落ちるかと思っただけで空間に穴が空いてそこに死体は落ちて行った。しかし、グロテスクだったな。

プラネン

『何やったんだ！？』

ロット

『いや、ジダイガさんの内臓を爆薬に作り替えて発火させただけですよ？』

プラネン

『何それ！？そんな事できるの？』

ロット

『錬金術とは物体の変換、化学の基礎であった力です』

プラネン

『ふーん・・・』

よくわからない、リイユウならわかりそうだ。

ロット

『では、3、2、1、0』

ロットは氷に手をつけると氷は鏡に変化した。すげえ！

プラネン

『それをどうしろと？』

ロット

『世界フェシオダに行くのでしょうか？』

プラネン

『ああ、そうだった。行きたくないけど』

ロット

『大丈夫です。神はいつでも見えています』

プラネン

『あーそですか』

ロット

『神の御加護がありますように』

プラネン

『ハア……』

ロットは無視してとりあえずフェシオダに向かうか……行きたくないけど。

ミラーワールド 12話

プラネン

『・・・ハア』

ここは世界フェシオダ、世界の端から端まで管理が行き届いていてとても治安がいい。リード達の本部もここにあり本当にいい世界だ、黒族以外は・・・。

プラネン

『だから、いい加減にしてくれ・・・』

リード

『黒族がこの世界に入り込むなど災いを呼ぶな！出ていけ！』

プラネン

『だから、ジダイガに呼ばれたんだよ』

リード

『問答無用だ！あの戦争の事忘れたか！』

プラネン

『だからさ・・・』

何でこんなにリードの遭遇率が高いのさ、何かの呪い？

リード

『そもそもだ・・・』

ドカーン バコーン！

リードの本部の方で爆音がする。襲撃みたいだ。

リード

『チィ！タイミング悪すぎる！さては黒族の仲間か！？』

プラネン

『知らねえ』

知らんて、しかしタイミングが良いな。これでリードから離れられる。

リード

『仲間じゃないならお前も来い！』

えー、仕方ない。でも勘違いはやだし。

プラネン

『仕方ねえ』

リード

『では行くぞ！』

リード速い！リードは何気ない様子で走っているが、こっちは汗だくで一生懸命追いかける。風の加護は便利なんだな。

本部に着くとコールドが誰かを追っている。

リード

『追いかけるぞ！』

プラネン

『ヘーイ……』

コールド

『現情報、標的は魔族。影亡き者の剣を奪い逃走。動きを停止させるには雷魔法が有効』

あの武器盗まれたってかなりヤバい事なんだけど、影亡き者の武器は触れただけで黒族を消滅させる危ない物だからトレイト達はその全てを管理して封印している。

バルグ

『俺はバルグ。これで復讐する、お前らに捕まる訳にはいかない』

リード

『逃がすわけにもいかない！雷魔法』
サンダーベイン

バルグ

『ストーンヘイル
岩魔法』

属性の相性が悪すぎるな、雷は岩の壁に当たり消滅した。

リード

『岩なら風だ！風魔法』
ヘルウィント

岩の壁は風圧で崩れた。風属性の方が有利だからな。

コールド

『行動制限、氷魔法』
ギガフリーズ

吹雪で視野が狭いな。

プラネン

『今だ！闇魔法』
ブラックハード

バルグ

『危機か、火魔法』
オーバーパワーバーナ

熱線とブラックハードがぶつかり合う。

ジュー、シュー

高熱で沢山の水蒸気に包まれる。

リード

『見えん！風魔法』
トルネイド

風の竜巻が水蒸気を吹き飛ばすが、バルグの姿がない。

プラネン

『バルグの姿がない？どうすんの？』

リード

『仕方ない、分割して搜索だ。プラネンお前は世界プロウスに行け』

プラネン

『こっとなったら仕方ねえ』

コード

『ユアタウに撤退、以後搜索』

リード

『では、プラネン行け』

プラネン

『わかったよ』

リードは世界プロウスの鏡を取り出す。仕方ねえから行くか。

もし見つからなかったらどうしよう……

ミラーワールド 13話

ドカーン バコーン

ここは世界プロウス、やたらと火山ばかりで熱い世界だ。噴火して
るな・・・

プラネン

『で？どうしろと？』

リードに細かい事聞いて無かったな、たしか泥棒を捕まえればいい
んだっけ？

プラネン

『泥棒どこにいる？』

まいったな、火山の近くは探したくないし火山から離れ過ぎると光
源が無いんだよな。不便過ぎるぞこの世界。

バギヤ

『おい！その少年！てめえの仲間が呼びだせ？』

フレイ・バギヤか、いつ見ても暑苦しいな。巨大な機械仕掛の武器
で地面をガンガン叩いている。

プラネン

『バギヤか、仲間って誰だ？』

リケ

『やー、プラネン来ちゃたよー?』

コード

『リケさん何で来たんです?久しぶりですねプラネンさん、兄から伝言です』

凶悪魔法使いとリードの弟か、伝言って何だよ?

プラネン

『ところで伝言って何だよ?』

コード

『はい、あの襲撃者はイークルズだという事が判明したのです。それと、プラネンさんはリプダクに帰るようにと言っていました』

プラネン

『ハア?!何だよここまで来て帰れか!』

コード

『僕は知りませんよ・・・、兄はジダイガさんと何か話していましたが』

ジダイガか、あいつなら何か知っているはずだ。

プラネン

『よし、ジダイガに知っている事全てを吐いてもらっか』

リケ

『ジダイガの事だから本当の事を言うとは思えないけどねー』

コード

『とりあえず、リブダクへ向かってもらいます、鏡はバギヤさんに用意してもらっているのです。そろそろ来ると思っていますよ』

プラネン

『結局帰るのか』

リケ

『いーんじゃない？ジダイガの事だしさー』

何のためにこんなに苦労したんだろ、リードとかリードとかリードのせいかな？苦労の原因はリードじゃねえか！

バギヤ

『てめえら！鏡持ってきたぜ！さっさとしろや！』

バギヤはちゃんと鏡を持って来たようだ。しかし、こいつがいるだけで熱さ倍増。

リケ

『プラネンー行こうよー』

プラネン

『お前も行くのか？』

リケ

『酷いなー、また分解しようかー？』

プラネン

『なんでだよー!』

いつもいつも、こいつの思考回路大丈夫なのか？

コード

『リケさんプラネンさん、喧嘩は良くないです』

リケ

『ごめんねー？行くよー。プラネン、さっさとしてねー』

リケは先にリプダクに向かって行った。やっぱりリケとは関わりたくない。

プラネン

『仕方ねえ、行くか』

リプダクの鏡の中へ入っていく。そして、気がつくとリプダクの草原に立っていた。

リケ

『畏みたい・・・』

地面から四つの鉄の棒が出て来て電気のバリアみたいなのに囲まれてしまった。

プラネン

『あの棒から電気が発生してんのか？』

リケ

『そうみたいだねー、それなら棒を壊してみる？』

プラネン

『単純だな！闇魔法』
ブラックハード

ドゴーン！

ブラックハードが当たった棒は粉々になったな、ん？また棒が伸びただと！

リケ

ウインドブレード
『風魔法』

カキッン！

棒は風の刃では切断出来ないみたいだな。

プラネン

ライトヴァーン
『光魔法』

棒は光線が当たってもびくともしない。

リケ

『うざいよー！雷魔法』
サンダー

ガラガラー！

棒は雷を吸収したようだ。

プラネン

『こつなりややけだ！』

ガキーン！ ガキーン！

対極剣で棒を叩くがびくともしない、それどころか電気が流れてきて痺れる。

リイユウ

『何事です？印術（七亡星の歪み）』

足元とリイユウの近くに印が刻まれ、印の力でバリア？の中からはリイユウの隣へ転送された。

ブラネン

『リイユウ、助かった』

リケ

『流石ーリイユウだねー』

リイユウ

『私の世界にこんな仕掛を、いい度胸ですね？ダイナミックリビ闇魔法』

ガラガラドカーン！！！！

本来棒があった場所は……。巨大な闇の雷でクレータになっていった。うそだろ……

ミラーワールド 14話

リイユウ

『新手ですか・・・』

目の前にはテルトス、バルグ、ハカがいる。

テルトス

『すみませんね、あなたには妨害されると大変なので』

リイユウ

『ここは私がどうかする。過去の道繋ぐは記憶空間は歪みかつての場所へ向かうは思い。転移呪文02番』

リイユウと三人は転移して消えてしまった。大丈夫かな？

リケ

『リイユウなら大丈夫だと思うよー。多分』

プラネン

『大丈夫だとは思うけど、相手は三人だからな』

ストグ

『お前らは俺があいてだ！』

そういえばまだ一人いたな。戦闘狂が。

リケ

『邪魔！ウインドブレード風魔法』

ヒューン ヒューン

ストグ

『あたらねえよ!』

プラネン

『くらえ!』

対極剣で切り掛かるとストグは拳でガードしやがった。

リケ

『ヘルウィンド
風魔法』

風の塊をもう一方の拳でガードする。今だ!

プラネン

『ブラックハード
最後だ! 闇魔法』

ドゴーン!

ストグ

『クツ・・・』

ストグは気絶したか、ん? 研究所の方で物音が・・・

プラネン

『行くぞ、リケ』

リケ

『わかったよ』

研究所に着くとリイユウが椅子に座っていた。

リイユウ

『テルトスとハカは今頃戦闘不能ですよ』

やべえこの人、ニヤリと笑ってる。

リケ

『後一人は？』

リイユウ

『そこです。』

リイユウが指差す先には傷だらけのバルグが

バルグ

『許さない、親友クロリアのかたき、ここで打つ！』

プラネン

『何言ってる？クロリアは生きてるんじゃないか？』

バルグ

『問答無用！』

バルグは盗んだ影亡き者の剣を構えリイユウに向かい走ってきた。

バルグは剣を振り下ろし……

リイユウはガードしなかった。

プラネン

『リイユウ何やってんだ!!?』

リイユウ

『ああ、生き地獄がこれで終わる。さよならです、みんな……』

リケ

『リイユウ……』

リイユウの姿は薄らぎ消滅してしまった……

プラネン

『リイユウ!この野郎!ゆるさねえ!!』

リケは途方に暮れている、

バルゲ

『リイユウは実験の名の元に多くの人を苦しめた!死ぬべき人だ!』

プラネン

『知らねえ!闇魔法』

ブラックハード

バルゲ

『ストーンヘイル
岩魔法』

ドゴーン！

ブラックハードは岩の壁を破壊するがバルグには届かない。

プラネン

『この野郎！』

対極剣で切り掛かるとバルグは影亡き者の剣でガードした。

バルグ

『まだわからないか？』

プラネン

『解らないさ！調和術（憎む人間の対立心）』

反発力でバルグを吹っ飛ばし研究所の壁に叩きつける。

バルグ

『ウグツ・・・』

プラネン

『死ねい！！』

グサツ！

バルグに対極剣を突き刺す、

バルグ

『アガツ・・・』

プラネン

『グチャグチャにしてやるよ！調和術（いがみ合う属性対立心）』

バルグの身体に送り込んだ闇と光の力は反発し・・・

バルグは死んだ

リアルワールド 外伝3

ジダイガ視点

今はリアルワールドに来ている。私もプランネンと同じ様に記憶がないところをリユウに拾われたのだ、過去の記憶を探すために手がかりぐらい無いのかと思いいリアルワールドに来ている。

因みに普通の奴ならリアルワールドに来る事は出来ないだろうが、私は空間を支配出来る。つまりはミラーワールドとリアルワールドを繋げて移動すれば良いだけなのさ。

ジダイガ

『さて、どこから探そうか。幻影（見えない暗殺者）』

とりあえず姿を消してから町に入るか、それにしてもこの世界は酷く空気が悪いな。

ジダイガ

『何だ？金属ばかり・・・』

金属で造られた巨大な建物？ばかりが並んでいる。地面は固まっているし金属のでかい箱？のような物が沢山走っている。

白衣を着た怪しい人がこちらを見ているな、私自身が見えているはずは無いのだが。

美和

『ついて来なさい、見えない人？』

仕方ない、気づいているならついて行くしかないか、白衣の人は巨大な建物に入って行ったのでとりあえずその中に入る。

ジダイガ

『何か用か？』

美和

『不思議そうねえ、なにせ見えない人が見えているんだからねえ』

白衣の人は細長い銃を取り出す、確かライフル銃だったか？

ジダイガ

『脅しても無駄だ』

ライフル銃の空間を一瞬ずらして切断する。これで武器はないはずだ。

美和

『見えたあ、空間をずらしているのねえ』

ジダイガ

『人間の目に見えるはずはないのだが』

美和

『そりゃあ、普通の人は見えないわね。だから私の目を改造したんだあ』

ジダイガ

『そんなに上手くいくはずはない』

美和

『いきませんよ？人間の身体にはリミッターがありますし、だから、弄つたのさあ！自らの頭をね！！』

ジダイガ

『狂人め何がしたいんだ？』

美和

『新しい実験体！人ならざる者！面白い！！』

白衣の右腕は急に巨大化して鱗やら鋭い爪やらが生え始めた。その腕で殴り掛かってきた。

ジダイガ

『血迷ったか！ブラックハード闇魔法』

ドゴーン！

ブラックハードで奴の変化した腕を吹っ飛ばす。

美和

『アハハ！痛いなあ！！』

白衣の腕はどんどん再生している。まずいな、この世界では魔法もあまり使えない、仕方ない。

ジダイガ

『私は帰る、さらばだ』

美和

『残念だなあ、これからのよ?』

知らん、長居するのは危険だ。空間に穴を空けてミラーワールドに帰る。

美和

『次は誰かを送りこむのもいいかしらねえ』

トルヴェザのカケラ

???

『サーヴェルドさん、久しぶりですね』

サーヴェルド

『カケラの一人と接触してきた』

???

『悲しき事です。何故あの二人が生まれてきたのでしょうか？救いなんて存在しないのに』

サーヴェルド

『四つのカケラは人の姿となり偽物の身体で生きる。しかし、神のカケラでしかない我々は人とは違う』

???

『私は精霊を統べるようにあなたは神の本を統べる。あの人は対立を統べもつ一人は調和を統べる。結局はトルヴェザ様のカケラなのです』

サーヴェルド

『我と??？は神の使命を受けた。しかし、残されし二人は・・・』

???

『調和の神、トルヴェザ様は全てを救って下さるはずです！』

サーヴェルド

『トルヴェザは封印にて永遠の苦しみを与える神でもある、忘れて

はいかんどぞ?』

?.??.?

『わかっていきますよ、せめて神の御加護がありますように』

ミラーワールド 15話

プラネン

『イークルズ！皆殺してやるよ！』

リケ

『プラネン少し落ち着いて・・・』

プラネン

『知らねえ！殺す！』

リケ

『ヘルウィンド落ち着きなさい！風魔法』

プラネン

『ブラックハード知らねえ！闇魔法』

リケ

『ウィンドフォーム危ないな！風魔法』

風で破壊の力を逸らしたか、だがまだだ！

プラネン

『ネガライト終わりな！闇魔法』

リケ

『テレポート殺す気か！？魔法』

リケは灰色の光の柱を避け逃げだしたか。この魔法ネガライトは光を反転させ闇にし羽族を殺す力だ。こんな魔法が使えるのは俺以外知らねえ。

八カ

『対立故に双方の力を使えるのか・・・』

怪我の治療でも済ませて来たのか？だが無駄だ！

プラネン

『今更来ても遅い！お前らを皆殺しにするんだからな！ブラックハーシャイトヴ
アイン闇魔法光魔
法』

ドカーン！

吹っ飛ばされる八カ、弱いな全く。

八カ

『・・・』

プラネン

『無言かよ！人思いに殺してやるさ！ネガライト闇魔法』

テルトス

ロストヘイル
『虚撃』

転移してきたテルトスは壁で攻撃を防ぎやがったか。

プラネン

『テルトス邪魔だ！こいつを殺したら相手になってやるよ！』

テルトス

『バルグもプラネンも何故わからない……復讐は復讐を生むだけだ』

プラネン

『知らねえ！死ね！闇魔法』
ブラックハード

絶対に許さない！関わってた奴らを皆殺しだ！

テルトス

『怒りか……魔法』
マクネテレポート

世界イズンプに転移されたか、目の前にはテルトスが浮いている。

プラネン

『仕方ねえ！先ずはお前を殺す！』

ミラーワールド 16話

プラネン

『テルトス殺してやるよ!』

テルトス

『落ち着きなさい、あなたは自分自身の力がどのようなものか知っているのですか?』

当たり前だろ?馬鹿か?

プラネン

『他を拒絶して否定する力だ!』

テルトス

『違います』

プラネン

『あ?じゃあなんなんだよ!ふざけるなよ!』

テルトス

『私は真面目です。あなたの力、対立心は確かに他に対する拒絶を増幅する力です。しかし、それは本来の力ではありません』

プラネン

『知らねえよ?』

テルトス

『本来対立心は、他人を拒絶する悪意を増幅する力。故に心、そし

てあなたは復讐という悪意を増幅され暴走状態にあります。自らの
力に溺れるとは……」

プラネン

『何でもいいんじゃないかねえか！てめえらが死ねばいいんだよ！ネガライต์闇魔法
ネガダーク光魔法』

テルトス

ロストヘイル
『虚撃』

テルトスは奇妙な壁を作り攻撃を防ぐ

守るな！うぜえ！

プラネン

『調和術（人間の本质と対立心）』

テルトス

『何をするきだ……』

プラネン

『てめえを殺すんだよ！ブラックハード闇魔法×20』

テルトス

『無駄だ！』

ブラックハードはテルトスにあたるが消滅してしまいダメージはない
やっぱりきかねえか。

プラネン

『どうした！テルトス！このエリア（人間の本质と対立心）の中では他人に悪意を抱くだけで強くなれるんだぜ？』

調和術（人間の本质と対立心）は範囲内の悪意を力に換える。だから、ブラックハードを何発も撃つ事が出来たのさ

テルトス

『それが本当の力か、しかし。ロストストーン虚撃』

ブラネン

『こんなもんじゃねえ！調和術（全てを否定する神の対立心）』

ザキッ！

ロストストーンを対極剣で切り裂いてやったぜ！

テルトス

『全てを否定して全てを切り裂くか・・・』

調和術（全てを否定する神の対立心）はあらゆる結合を否定する。範囲効果だから俺も危険な状態だけどな

ブラネン

『恨めよ憎めよ怒れよ！悪意で人を殺せるぜ？そらよ！』

剣を振り回す、テルトスすらも結合を否定すりゃ切り裂ける！

テルトス

ファイア グロースネツザール ストマジック ヌットヴァーノン イー
『火魔法草魔法岩魔法魔法光魔法闇魔法』

プラネン

『多属性かよ！調和術（孤独の恐怖による破壊への対立心）』

グサツ！

くそう！魔力属性だけは攻撃を反らせることが出来ない、ただでさえ極端な存在の闇と光にとっては弱点でしかないのに！

テルトス

『ダウンカイト
魔法』

また魔力属性か！

プラネン

『お前の魔法の才能が憎いな！ブラックハード
闇魔法×80』

グサツ！

魔力のダメージがうぜえ！だがな！

テルトス

『ロストヘイル
まずい！虚撃×5』

ブラックハードを防ぐのに必死なテルトスの後ろに周り込む！
そして剣を振り下ろす！

・・チヨキ。

くそう！避けられた！腕を浅く切っただけか！

テルトス

『グアアアー！！』

テルトスは傷口を手の平で押さえて酷く苦しんでいる、訳わかないが今だ！

ブラネン

『最後だ！テルトス！ブラックハード闇魔法×50』

沢山の破壊の力がテルトスに向かい・・・

テルトス

『グアア！いい加減にしろー！（全ての魔法）』

全ての力が向かってくる！

避けられないし防ぐなんてそれこそ無理だ・・・終わったか・・・

ジダイガ

『無様なな、操作（空間の墮神との契約）』

ジダイガは空間に穴を空け全ての魔法を異空間に反らした。

テルトス

『まさか、あなたが来るとは・・・』

ジダイガ

『テルトス終わりだ』

ジダイガはテルトスを指差すと・・・

テルトス

『グアアアアアアア！！！！』

血を吐き苦しみだした、一体何なんだ？

ジダイガ

『苦しいだろ？貴様はプラネンに浅く切られただけで苦しんでいたな？』

貴様自身が反物質で特殊な守りで守っていたが体内までは防ぎきれないんだろ。つまり、物質を体内に転移されたらどうなる？』

テルトス

『・・・何故わかった』

ジダイガ

『貴様は触れた物質を消滅する事が何故できる？それは貴様が常時

反物質を創造する力を使っている状態だからだろ？ならば、自身が物質ならばその力で消滅している』

テルトス

『・・・』

ジダイガ

『貴様の特殊な守りも反物質を創造する力ではないか？自身が消滅する前に反物質を盾がわりにするんだろ、だが自身の体内に創造は使えないだろ』

テルトス

『参った』

ジダイガ

『詰みだ、貴様が（全ての魔法）を使い魔力を使い切るのを待っていたのだからな』

テルトス

『まだだ、まだ終わらない』

ジダイガ

『終われ』

テルトスの姿が消えた、死んだのか？

ジダイガ

『プラネン、貴様を助けてやろう。そしてやりたい事をやれ、そして私の目的を達成する鍵となる』

プラネン

『一体なんだ？』

ジダイガ

『ダルア・メキア・レダ・ローグ・プロキア。時代が創られた墮ちた神の名はプロキア』

それは共鳴の預言者の預言のカケラ・・・

プラネン

『訳わからない、何をさせる気だ？』

ジダイガ

『好きな様にすればいい、それでいい一つは理解した残りは二つ。その内一つは貴様が解決する』

プラネン

『わからねえ』

だが、イークルズを潰すなら。世界で最強になってやるさ！

ジダイガ

『理解する事はない、やりたい事をやれ。私の駒よ』

ミラーワールド 17話

プラネン

『そもそもなんでジダイガがいるんだ？』

この世界イズンプは毒の沼が辺りにあり訳ありぐらいしかよりつかない。

ジダイガ

『簡単な事だ、テルトスを倒すのに空間移動をすると、ばれて逃げられる可能性があるため隠れていた』

プラネン

『何でここに来るってわかったのさ』

ジダイガ

『この世界ならテルトスはある程度本気を出せる、テルトスの力は周りへの被害が大変な事になるからな』

プラネン

『なるほど、それならどうやってばれずに居たんだ？』

ジダイガ

『テルトスはこの世界の地形を把握していた。ならば、その過信を覆す』

仮面をつけたドグ・バルカルが歩いて来ている。

バルカル

『・・・・・・』

プラネン

『ああ、バルカルの力か』

ジダイガ

『そうだ、貴様でも理解出来たようだな』

バルカル

『・・・・・・』

バルカルは幻影で地形をわからなくする能力がある。だが、お前は
いつたいなにを考えているんだ？

ジダイガ

『バルカル帰れ』

バルカル

『・・・・・・』

バルカルはどこからか取り出した鏡でダルミトへ帰って行った。あ
いつ何も話で無かったよな？

ジダイガ

『さて、厄介な人物が来たが？』

プラネン

『何処だ？』

ジダイガ
『後ろ』

後ろを振り向くとクラウ・トーラが立っていた

プラネン

『えーと、ヤバくね？』

トーラ

『いいな？決意の感情が見える。目標が出来たんだね？』

プラネン

『いや、お前には関係ないから』

トーラ

『欲しいな？対視（心喰）』

ジダイガ

『無用心過ぎるぞ！操作（空間の墮神との契約）』

トーラに感情を食われる前にジダイガが転移してくれた。助かった。
・
・

トーラ

『良いでしょ？もう何も考え無くていい。ただ居るんだよ？』

ジダイガ

『プラネン貴様は純粋な馬鹿か？！感情を食われて廃人になりたいのか？』

ブランネン

『は？このいかれた奴をどうにかできるか！リイユウしか止める事ができなかった・・・』

ヤバいなんか悲しくなってきた。リイユウなんで・・・

トーラ

『悲しいの？それも皆ちようだい？』

ジダイガ

『貴様は用はどうした？』

トーラ

『ジダイガは全部見透かしてるの？じゃあいや、ランドリタールの活動もあるし』

トーラは何処かに歩いて行ったが、ランドリタール？知らない組織だな？

ジダイガ

『ランドリタールについて知りたいならギランダに聞け、奴もその一人だ』

マジで？ギランダは何か活動してたのか？

ジダイガは空間を切り裂き何処かに行ったか、そういえば、ジダイガも何か怪しいんだよな・・・

ミラーワールド 18話

足元にバルカルの残したダルミトの鏡が落ちている、拾っておくか。

プラネン

『参ったな・・・どうしようか・・・』

ここからは一人でどうにかするしかない・・・リユウはもう居ないんだ・・・

プラネン

『とりあえず、誰か居ないか？』

周りを見渡すと人影が二人分。

プラネン

『その二人なんか情報を・・・イークルズか！？』

あの二人は黒い十字架の指輪をつけている、黒い十字架はイークルズの証だ。

ブレイク

『・・・だからどうした』

テル

『ねえー、ブレイク。この世界飽きたー。違う場所行こうよー』

ブレイク

『テル、黙れ』

なんだこいつら、ブレイクと呼ばれた奴は見たことないぐらい巨大な剣を背中に背負っている。テルはただの子供じゃないか。

ブラネン

『イークルズなら容赦しねえ!』

剣を構える、一対一になるだろうな、あのチビが戦える訳無い、魔法使いならわかるが奴はあまり魔力がないようだからな

ブレイク

『ガキがおこれるな!』

ブレイクは近くにあった岩の塊に手をつける、四メートルぐらいのでかい岩だ。

そして

岩を持ち上げて放り投げてきた!?!何トンあるんだよ!!

ドガン!!ガラガラ!!

ブラネン

『あ、危ねえ・・・』

とっさに避けたが、目の前にはブレイクが・・・速い!

ブレイク

『飛べ・・・』

ブレイクは巨大な剣を振るつ、対極剣で守るが・・・

力が強すぎる！飛ばされて岩にぶつかる。

プラネン

『痛たた・・・』

ブレイク

『現実だ！俺などテルトスの足元にも及ばない、お前はそれ以下だ』

何だって？まさかな・・・

テル

『行こうよ』

ブレイク

『プラネン・・・ノズインダに來い』

あいつらは鏡を使い違つ世界に行ったか・・・何だあの強さ・・・

プラネン

『ノズインダか』

目の前に残された鏡を見る。

????

『プラネンさんプラネンさん』

プラネン

『おっと、何だ誰だいきなり後ろから話かけるな！』

明らかに魔法使いな男が後ろに立っている。

????

『私は謎なのです』

プラネン

『わからねえよ!』

????

『謎だからいいのです。渡してバイバーイ』

鏡に入って行った？渡し物って残して行った鏡か？まあいいや持つて行こう。

世界ノズインダに向かうか

ミラーワールド 19話

ブレイクの残した鏡を使いノズインダにいるが・・・

プラネン

『何だあれは・・・』

目の前に鉄で出来たでかい建物が・・・

カクタ

『来たか、あれはイークルズのコウジヨウと言うらしいな』

プラネン

『うわ！何だよいきなり・・・』

カクタ

『今から侵入するのさ、さらばだ！』

カクタはとんでもないスピードで走って行った。

プラネン

『・・・とりあえず行くか』

コウジヨウは普通に扉が開いていて簡単に入る事が出来た。中は金属でできた何かが動いて何かしてる。機械というやつか？でかいな。

ザリガン

『待っていたゾ、プラネン。我はザリガンだ、よろしくナ？』

プラネン

『お前何者だ？操られてるのか？』

ザリガンと名乗る奴はどうしても生きてる感じがしない、まさかゾンビか？

ザリガン

『まったく、礼儀がないナ、私は私誰でもナイ』

プラネン

『面倒だからいいや、でさ目的は？』

ザリガン

『我ハ、この工場の管理を任せれた、後は貴様の処分サ！』

プラネン

『やってやるさー！』

ザリガンの隣に水晶玉が浮いている、明らかに怪しい！先ずは水晶玉だ！

ガン！

水晶玉に攻撃を弾かれた？！

ザリガン

『なんダヨ、我は無視シテ。ウォルト大丈夫カ？』

ウォルト

『mond17e3』

ザリガン

『わからないヨ・・・』

あの水晶玉はウォルトと言っのか？

プラネン

『ならザリガンお前が相手だ！』

ザリガン

『我は戦え無いんだ、代わりに我の作品が相手だヨ。起動し口！8号機』

でかい機械が人型になりこっちに向かって来た！

プラネン

『ディーキル
闇属技』

ガコーン！

あのでか物にはあまり効いて無いか。

ザリガン

『我のロボットだ！そんな攻撃効かないヨ？8号ビームだ！』

何かでかい銃の様な物を取り出し何かパワーをためている。ヤバくね？

カクタ

『ザリガン！首を切られたく無ければ降参しろ！』

カクタはザリガンの後ろに現れた、コウジヨウの壁と同じ色の布を使い隠れてたみたいだ、何で気づか無かったんだろ……

ザリガン

『構うナ！8号ヤレ！』

プラネン

『マジか！調和術（人間の欲望大地からの対立心）』

8号を地上と対立させ浮かすが重さで落ち倒れる、すると起き上がれなくなった。

カクタ

『腕を貰うぞ！』

カタン……

カクタがザリガンの腕を切り腕が地面に落ちると金属っぽい音が……
・しかもザリガンから血が出てないよ？

ザリガン

『我はキラーに造らレタ、ヒューマノイドさ。それヨリ、アーク！
居るならタスケロ！』

コウジヨウの奥から来たのは、あの怪しい奴！

アーク

『どうもー、私は謎なのです。なんてねー』

アークが来た瞬間カクタはジャンプして天井にくっついてる、すごいな

ザリガン

『後は任せタ、行くゾ、ウォルト』

ザリガンとウォルトは奥に逃げて行ったか。

アーク

『任せられたー、クイズだよ？金属は燃やすとどうなるの？』

プラネン

『熱くなる？』

アーク

『せーいかーい、燃えませんでした。惜しかったね、頑張ったね？』

プラネン

『うぜー！ブラックハード闇魔法』

アークは素早い身のこなしで避けた。

ドガン！

壁にぶつかるが穴が空かない、硬いな。

アーク

『バウンドフレイム熱い熱い、火魔法x5』

飛び跳ねる炎が5こか、だんだん暑くなってきた

プラネン

『このやるー!』

剣を振り回すが炎は切れない。

アーク

『私、セイ・アークの芸術さ。 バーナタワー 火魔法×4』

炎の柱が現れる、暑い。

カッン・・・

右の方から音が・・・

ヒュン

アークが音に気を取られている間にカクタがアークの後ろをとり足払いをかけ転ばせる。

プラネン

『 ブラックハード 今だ! 闇魔法』

アークの体を吹き飛ばし頭だけが残る。

アーク

『何さ、頭を残したって事は聞きたい事でも?』

苗字がセイなら確実に黒族だからな、これくらいしないと。まあ、
気配で大体わかるけどな。

プラネン

『こんな所連れて来て何のつもりだ？』

アーケ

『何って、時間稼ぎ？』

プラネン

『は？』

アーケ

『この奥に鏡があるよ、行けば？』

プラネン

『そうか！ライトウェアン光魔法』

アーケは灰にしとく、邪魔だし。カクタはいつの間にかいない。奥
にあった鏡は、リプダクだって！？

ミラーワールド 20話

久々に世界リプダクに来ているが・・・

リケ

『酷いよー！プラネン殺そうとしたよね?!』

プラネン

『悪かったから、もう冷静だから大丈夫だよ』

リケ

『えー、悪かったですむのー?』

プラネン

『本当にゴメン』

リケ

『もういいよ・・・。それよりさー、上』

上?見上げると巨大な島の様なのが浮いてる!?

プラネン

『何だよあれは』

リケ

『イークルズの基地みたいだよー?この世界にはもう人は居ないんだからいい標的だったんじゃない・・・』

リケは落ち込み始めた・・・。リユウの事は振り切らないと。

プラネン

『リイユウの事は振り切るんだ！そんなんじゃイークルズに負けるぞ！』

リケ

『そうだね……。よし！プラネン掴まって！』

リケはマントを外し白い翼で羽ばたく。俺は黒族だが光の属性も持っているためか羽族に触れても大丈夫だ。リケに掴まると空中に浮く。

リケ

『重いー、ウインドフォーム風魔法』

リケは風を纏い更に上昇する。

プラネン

『着いたか』

リケ

『私が頑張ったんだよ！』

プラネン

『リケありがとう』

この島？金属で出来ているな、島の中心に巨大な機械の柱が……

リロード

『はじめまして、レイ・リロードです。貴方はプラネンですね、ア

「クから聞いております」

プラネン

「お前の目的はなんだ！」

リロード

「イークルズの目的はこの機械、ダークミストアートを盲点であるこの世界に設置すること。私の目的は強い組織に守ってもらふこと」

プラネン

「ならお前を倒す！」

リケ

「何かこういう人嫌い」

リロード

「まあいいですよ」

リロードは長い槍を取り出し構える。

プラネン

「どりゃー！」

リロード

「単純過ぎませんか？」

カキン！

斬撃は槍で防がれる。

リケ

『私も居るよ？風魔法』
ヘルウインド

リケはヘルウインドをリロードの手元にぶつけると、リロードは槍を手放してしまう。

プラネン

ディーキル
『閻属技』

スパン！

槍を真つ二つに切り裂く

リロード

『槍が、まあいいですよ。』
プラネン
『変化』

リロードが俺の姿に！？

リケ

『マジでー』

リロード

『凄いでしょう？風魔法』
ブラックハード

リロードはリケにブラックハードを・・・

リケ

『闇はヤバい！風魔法』
ウインドフォーム

プラネン

『おいおい、リングバリア光術』

リケは風と光の守りで無傷か、

リロード

『次です、リケラーサ変化魔法』

今度はこっちかよ！

プラネン

『ガハッ！・・・』

くそう、魔力の攻撃はヤバいんだよ、とりあえず倒れとこ・・・

バタン！

リロード

『次は貴方です。プラネン変化』

リケ

『サンダーベイン雷魔法プラネン今だよ！』

プラネン

『おっしや！調和術（いがみ合う属性対立心）』

リロード

『ウウ・・・』

バタン

リロードの姿に戻り倒れた。

プラネン

『良くわかったな？』

リケ

『プラネンがあれだけで倒れる訳ないじゃんさー。後はリロードがプラネンに変化したら体内の闇と光の力を暴走させればリロードは自滅ー』

プラネン

『そんな所だ、行くぞ！』

リケ

『アイアイサー！』

柱の内部へ向かう。内部は円形の部屋になっていた。そして、部屋
の中心には巨大な機械が。

キラー

『やあ、プラネン。どうだ私のダークミストアートは？』

プラネン

『しらねえよ！』

キラー

『さあ！全ての人の解放を！人は人です、差など存在しない！仲間
になりませんか？』

プラネン

『なるかよ!』

リケ

『私もさー』

キラー

『ならば仕方ない!私の技術は弱者のため!貴方達は排除します』

そして、イークルズのリーダー。ワー・キラーとの戦い。これが終わったら・・・

ミラーワールド 21話

キラー

『こちらは三人ですが貴方たちはどうします？』

キラーの隣には黒族が一人てテールが一人か。

スラウ

『キラー様にお手数をかける訳にはいかないのじゃ、レルはどうするかの？』

レル

『我は、プラネン貴様に決闘を申し込む！』

プラネン

『相手になって・・・』

コールド

『やる事はない。レルの相手は私だ』

何だいつの間に！

リケ

『遅いよーコールド。レルはたのんだねー』

レル

『仕方ない、貴様が我の相手だ！』

コールド

『敵を確定、排除する』

キラー

『ハア、ならば私がプラネンの相手をすればいいか……。バル・スラウ残りは任せる』

リケ

『えーこいつかー』

スラウ

『仕方ないのう、わしが相手じゃ』

コールド視点

相手はテール物理攻撃は効果薄

レル

『この部屋は狭い、表へ出る！』

現状、機械の柱の外、空中落下に注意

コールド

ギガフリース
『氷魔法』

レル

『我に吹雪など効かん！』

ヒュン！

レルは翼を広げ空中を滑空し一直線に向かって来ている。迎撃せよ

コールド

アイストーン

『召喚』

ガリン！

氷のゴーレムをそのまま貫通。壁を増加せよ

コールド

アイストーン

『召喚×80』

氷のゴーレムを上空から降らす。

レル

『無駄だ！』

レルは全てを貫き私の前まで来て脚を止めた

コールド

『前方標的、ワイバフリーズ氷魔法×120』

沢山の氷の塊を呼び出しレルに発射せよ

ヒュンヒュン

レル

『当たらなければ無意味！』

レルは私の周りをぐるぐると飛び回る。残像にて視野に捉えるのは
不可か

コールド

アイストアシスネーク

『召喚召喚×300』

氷のゴーレムは私の近くにて待機、氷の蛇は攻撃開始。

グサッ！ グサッ！ グサッ！

レル

『無駄だ！』

私の周りを飛び回るレルは滑空しながら切り裂く、私は羽族の守りにてかるうじてダメージは無い

コールド

『見えない・・・』

レル

『終わりだ！』

レルは瞬時に軌道を切り替え突っ込んでくる

グサッ！！

レルの爪は氷のゴーレムを貫くが私の所まで届かない。

レル

『何故だ！』

コールド

『羽族の守りとの同化』

私は氷のゴーレムに触れていた、そのため羽族の守りがゴーレムも守る。

レル

『抜け出せない?!』

コールド

『氷との同化』

我が身を凍らせ、氷を広げて行く、そしてレルを飲み込む。

レル

『やめろ!!--』

コールド

『不可、私の目的は勝つ事ではない』

だんだん大きくなる氷はとうとうレルを完全に飲み込む。

リケ視点

リケ

『解体ゲームの始まりさー』

遊んであげるよ黒族さん

スラウ

『全く、おかしな羽族もいたものじゃ』

リケ

『簡単には終わらせないよー？ウインドブレイク風魔法』

スラウ

『光を使えば簡単に勝てるじゃろつに。しかし、風は厄介じゃ、ホレ』

あれは試験管？それを落とした？

ガツシャーン

割れた試験管から飛び散る液体は地面を凍らせ、スラウは地面を滑り風の刃を避ける。

リケ

『へえー、凄い液体だねー』

スラウ

『次はこれじゃ』

スラウはいくつもの試験管を取り出しばらまく。

ドガン！

ドガン！

ドガン！

ドガン！

リケ

『爆薬かー、煙りでよく見えないよー』

スラウ

『よそ見はいかんぞ？』

ガツシャーン

リケ

『冷たい！』

足元を見れば足が凍りついている。

スラウ

『ホレ』

スラウは更に試験管を投げつけてきた。

リケ

ウインドフォーム
『風魔法』

ドガン！

ドガン！

スラウ

『やったかの？』

リケ

『油断大敵だよー風魔法×3』

ウインドブーメラン

ウインドフォームで爆発は軽減化してたからあまりダメージないのさー

スラウ

『なんじゃと!』

ウインドブーメランはスラウの足と腕を切り裂く、再生しても帰ってきてまた切り裂く。それを何度も繰り返す。

リケ

『ウインドブーメランは何度も何度も行ったり来たりを繰り返す素晴らしい魔法だよねー』

スラウ

『クツ・・・なんつう奴じゃ』

スラウはボロボロになってきたなー

リケ

『そろそろ終わらせようかー、ライト光魔法』

スラウの姿は崩れて無くなった。コールドは問題無いけど、プラネン大丈夫かな？

ミラーワールド 22話

プラネン

『キラー！お前には負ける気がしねえ！』

キラーから魔力のかけらすら感じない、武器すらも持たないし運動が出来そうにも見えない。

キラー

『何故貴方は私の邪魔をするのです？ただ、この世界に蔓延る差別が許せないだけなのに』

プラネン

『そのために何をする気だ！』

キラー

『私はダイクミストアート転送装置を使い差別の根源であるホワイトレッグとトレイトを内部から滅ぼすつもりだった、それだけです』

プラネン

『ホワイトレッグは既に滅んだはずだ！お前らイークルズによってな！』

キラー

『何を言っているのです？あの戦争はザラ様がお亡くなりになられたためホワイトレッグとは決着がついていないのですよ？』

プラネン

『嘘までついても無駄だ！』

キラー

『ならば仕方ない、私の技術、科学の力を見せてやるう！』

プラネン

『しらねえよ！剣技^{ウェイブ}』

剣を振り衝撃波を作りだす、くらいな！

キラーは右腕でガードしたか

カキッン！

衝撃波を弾いた？白衣が破れた程度だと？

キラー

『波はこうやって使うのさ！（キラールパルス）』

キラーは鉄の輪を空中に投げると、空中で輪が静止する。あれ落ちないよ？

キーン

ザギツザギツザギツザギツザギツ

体が切り刻まれている！？何だ？キラーは何もしていない？

プラネン

『いったい何だ？』

キラー

『無学だな！これが科学の力さ！（キラートランス）』

キラーは鉄の輪をもう一つ上空に投げると、やっぱり空中で浮く。

キーーーン

プラネン

『グアアアア！！』

頭が割れるように痛い！？何だよだから！！

キラー

『素晴らしい！魔法などと違い科学は全ての人に力を与える、そこに差は存在しない！』

キーーーン

キーーーン

プラネン

『クツ・・・ブラツクハード闇魔法』

空中に浮いている鉄の輪を破壊する

ドガン！

キラー

『野蛮ですね・・・すみませんがどんな方法も使います』

キラーは沢山の鉄の輪を空中に投げると、空中で鉄の輪は静止する。

何で？浮遊魔法とかの感じも無いのに。

プラネン

『また壊せばいいさ！ブラックハード闇魔法』

キラー

『起動せよ（キラールフレクト）』

キーーン

キーーン

ブラックハードがキラーの目の前で静止するだど！？魔力がきれ結局キラーにも鉄の輪にも当たらない。

プラネン

『何でだよ！一度もキラーは魔法も技も使ってきてないのに！』

キラー

『いい加減諦める！（キラールス）』

キーーン

キーーン

ザギツザギツザギツザギツザギツザギツザギツザギツザギツ

くそう！何もしてないのに切り傷が増えていく！それにしても、あの違和感のある音は？

プラネン

『調和術（孤独の恐怖による破壊への対立心）』

謎の斬撃を防がないと！調和術（人間の本質と対立心）は今の状況ではあまり意味ない、調和術（全てを否定する神の対立心）は逆にポロポロにされる。調和術は範囲効果だからな・・・

キラー

『どうした？これが科学の力だ！』

キーン

キーン

キーン

キーン

くそう！イライラする！

ガツン

対極剣で地面を叩くと・・・剣が地面に引っ張られてる？もしかしてこの島は磁石で出来てる？

ならば！これをやってみるか！

ブラネン

『調和術（傲慢な反発強化する対立心）』

磁石の反発を強化してみる、すると鉄の輪は空高く飛び上がった。

キラー

『何！私の仕掛を見破ったか！』

プラネン

『終わりだキラー！覚悟しろ！』

うん、実は運が良かったただけだけどね。

キラーに一気に接近して剣を振り下ろす！

カキッン！

キラーは左腕で剣を受け止め、右手で鉄の棒を持ち殴りかかってくる！

キラー

『このっ！』

プラネン

『調和術（人間の欲望大地からの対立心）』

俺は大地から反発を受け空中に浮かぶ。そして調和術は範囲がある、キラーも範囲内で急に浮かんだためバランスを崩している。

キラー

『ウワッ！』

キラーから一歩分離れ

プラネン

ブラックハード
『闇魔法』

ドガンー！！

ブラックハードはキラーの心臓を貫く。キラーはその場に倒れ動かない。

プラネン

『終わったのか・・・』

リケの方を見ると光魔法でスラウを灰にしていた。

リケ

『キラーを倒したんだね・・・』

プラネン

『これでイークルズは壊滅だ』

後は残党をどうにかすればいいか。

?????

『イークルズは壊滅しない！それがザラ様との約束だからだ！』

何！？

後ろを振り向くと鉄の棒を杖がわりにしてキラーが立っていた！

キラー

『もうこの作戦は使わない、この島は爆破する』

キラーは手元の小さなスイッチを押すと・・・

ドガーーーーン!!!!!!!!!!

この島が爆発を始めた!

リケ

『早く脱出するよ!!』

ブラネン

『わかった!』

キラーは壁に寄り掛かり

キラー

『また会おう!次に会う時には仲間になっていて欲しいものだ』

と言いボタンと倒れた。

リケ

『早く掴まって!!』

リケに掴まり、島を脱出し遠くから島をみる。島は最後に大きな爆発を起こし、地面に墜落した。

プラネン

『島は跡形もないな』

リケ

『そういえばさー、これでイークルズは壊滅したんでしょ？キラールの最後の言葉が気になるけどー』

プラネン

『問題無いさ、イークルズのリーダー、ワー・キラールは倒したからな』

ジダイガ

『まだだ』

急に空間を破いてジダイガが現れる。

プラネン

『何でだよ？キラールは死んだぜ？』

ジダイガ

『キラールは倒れる直前に・・・』

イークルズを三つの組織に分割した』

ミラーワールド 23話

プラネン

『イークルズを三つに分割!?!』

ジダイガ

『そうだ、そしてキラの脅威はまだ終わらない』

リケ

『キラの四つの機械かな?、話は聞いた事あるよー』

プラネン

『まだあんのか!』

ジダイガ

『データクミストアートシンリープロダクツヨビエイドネクスバザズメンシフオニ転送装置生産装置強化装置洗脳装置の四つだ』

プラネン

『データクミストアートは破壊したから後は三つか・・・』

洗脳装置はヤバいだろ、そんなの造るキラって何者だったんだ?

ジダイガ

『とりあえず情報は伝えた。言っておくが私は誰の味方もしない、協力するのは利益があるからだ』

ジダイガは言いたい事だけ言っと空間を切り裂いてどこかに行った。全く本当に何を考えてんだか

リケ

『簡単には終わらないみたいだねー、どうするー?』

ブラネン

『もちろん、イーケルズをやっつける!』

リケ

『なら先ずは情報収集だねー、どうするー?』

ブラネン

『うつ・・・。』

どうしよ、そこまで考えてなかった。

デュラン

『ひっさしぶりー!二人とも元気ー?』

ブラネン

『ウワツ!いきなりなんだ!』

ハイテンションのデュランがいきなり現れたためリケは啞然としてる・・・

デュラン

『情報持ってきたんだよー?気が利くでしょ』

ブラネン

『まあ、うん、そつだな・・・』

イーケルズの情報の事を言っているのか?

デュラン

『宝物のありがさ！レッツトレジャーハント！』

プラネン

『しらねえよ！？イークルズの話じゃ無かったのか！？』

デュラン

『イークルズ？なにそれおいしいの？』

プラネン

『いや、お前に聞いた俺が馬鹿だった・・・』

デュラン

『プラネンが馬鹿なのは元からでしょ？今更気づいた？リケーそうだよー』

リケー

『いきなり私に話を振るの？まあ、否定はしないけどねー』

否定してよ、いい加減落ち込んでくるんだけど。

デュラン

『置いといて・・・。チアルビに行って来なよ、操作（転移符）』

えっ？おい待てや！・・・

ザバーン、ザバーン、

目の前に海が見える、本当に世界チアルビに来てしまったようだ・・・

.

リアルワールド 外伝4

ジダイガ視点

今現在美和の研究所にいる、どうやって来たかは空間を操作すれば簡単だ。

美和

『また貴方なの？私今忙しいのよお？』

美和は何やら薬を調合しているが・・・異質なのは美和の左腕、鱗のようなものが生えている。

ジダイガ

『貴様も興味を持ちそうな話だが？』

美和

『興味を持ちそうな話ねえ、いつたいなにかしらあ？』

ジダイガ

『リアルワールドの人間を一人連れていく』

美和

『じゃあ、私が・・・』

ジダイガ

『貴様以外だ！そもそも人間かどうかすら疑わしい』

美和

『酷いわねえ・・・連れて行くなら尾是君がいいかしらねえ・・・』
ジダイガ

『今すぐではないがな、その薬でなににする気だ・・・』

美和は完成したであろう薬を注射器に詰めている

美和

『貴方には関係無いわよ？まあ、実験体になってもらえるなら・・・
ねえ？』

ジダイガ

『却下だ！』

美和は自分の左腕に注射すると、人間の腕に戻る

美和

『イマイチだなあ・・・改良の余地があるわね』

ジダイガ

『とりあえず、また後で来る』

美和

『その前に名前教えなさいよ？どうせ私の名前は知っているのよね
え？不公平じゃない？』

ジダイガ

『セイ・ジダイガだ』

名乗ったのだから今こそ帰る。

美和

『待ってるわよ？ジダイガさん？アハハ！！』

ミラーワールド 24話

ザバーン ザバーン

ああ、海だ。

メルシア

『我はロトユ・メルシアなり、いざ尋常に勝負！』

・・・

リケ

『海綺麗だねー』

プラネン

『そうだな・・・』

メルシア

『おのれー、無視しおって！覚悟！・・・ゴフッ！』

メルシアは槍を下手くそに構え・・・

走って転んだ。

リケ

『クスッ・・・』

プラネン

『・・・ああ、海だな』

メルシア

『笑うなー!!』』

自称メルシアはどうやらイーグルズらしいがこんなやり取りを繰り返していれば闘争心も失せる。

リケ

『暇だねー』』

プラネン

『暇だね』』

メルシア

『許さん!!』』

ヒュン!

メルシアが槍を投げてきたので剣で弾く

ポチャン

弾いた槍は海に落ちてしまった。

プラネン

『わりい、やっちゃった』』

メルシア

『こんなはずでは・・・シクシクシク・・・』』

泣き出した……ここまで戦にくい奴に初めて会ったな……
ん？リケがメルシアに近いて……

リケ

『そんなんで泣くもんじゃないよー？（あまり五月蠅いと解体するよ？主に頭を？）』

ゾクッ！

何か凄い寒気が……あいつ小声で何を言ったんだ？

メルシア

『すみませんでしたー！！』

物凄い勢いで逃げて行くメルシア……ご愁傷様

リケ

『さーてー、海にきたからには？』

プラネン

『海に入るのか？』

多分寒い、日差しは暑いのに海には誰もいないからな？

リケ

『戦闘だよねーウインドブレード風魔法』

ヒュン！

リケは物陰に隠れていた人物に魔法を使う

カキツン！

その人物は巨大な盾で身を守る。頑丈そうだし人が一人隠れるぐらいの盾だ。

ガルシルド

『私はレイ・ガルシルド。メルシアを見かけたため来てみたが案の定か』

ザリガン

『何で我まで来ないとナノ？帰らせてヨ』

ガルシルドの後ろからザリガンが現れる。

ガルシルド

『イークルズの騎士として我が身断つ覚悟で盾となれ！』

ザリガン

『嫌だヨ、修理するのは結構気分的に不愉快なんだヨ』

何だ？仲間割れか？

プラネン

『めんどくせえ、誰が相手だ！』

ザリガン

『我は探知機能でメルシアを見つけたんだカラ、戦いは任せるヨ』

そういつてザリガンは逃げだした。

リケ

『私は疲れたからプラネンよろしくー』

プラネン

『任せる！やっつけてやるぜ！』

ガルシルド

『騎士は盾、我が身を守るべき者達のため断ちましょー』

プラネン

『ハッ！直ぐに崩してやるよ！剣技（二連撃）』

カキッ カキッ！

やはりあの盾で守られるか・・・

ガルシルド

『騎士は守る者、簡単にはやられん』

プラネン

『チッ！ブラックハード闇魔法』

ガルシルド

『フツ・・・』

カキッ！

何だと！ブラックハードを弾き向きを反転させた！

プラネン

『自分の攻撃やられるとか洒落にならねえ、ライト光魔法』

光の力で闇を消滅させる

ガルシルド

『時間だ、今から私は撤退する』

プラネン

『ハア？行かせねえよ！ダークヘル闇魔法』

カキツン

闇のエネルギー弾も弾くか。

ガルシルド

『時間稼ぎはすみませんでしたので・・・』

ガルシルドは鏡を使い世界を移動する、追いかけてやる！

プラネン

『リケ起きろ』

リケ

『・・・スウスウ・・・』

こいつ・・・どこからか持ってきたシートを地面に敷いて自分の翼に包まり寝ている。

プラネン

『寝るなー!!』

リケ

『・・・やだよー眠いよー』

仕方ねえ、リケを背負いガルシルドの落とした鏡へ向かう、向かった先はイエロザか・・・

ミラーワールド 25話

今は世界イエロザの砂漠に居る、てゆうかイエロザが砂漠だ。

リケ

『・・・スウスウ・・・』

リケは寝ているし・・・黒族なら睡眠をとる必要もないが・・・仕方ないか。

グサツ

自分の腕を切り裂いて滴る血を瓶に入れる。

プラネン

ホーリークラッシュ
『光魔法』

瓶の中の血から闇の属性を打ち消す。これだけで最強の薬になる、ただの血だがな・・・

イエロザのボロ船の方向を見るとテールが二人・・・アレ？多分小さい方がデューンだが・・・もう一人は？

デューン

『お姉ちゃん？どゆこと？』

???

『あのグランドの爺さんは絶対にあんたを後継者にしようとするんだから帰って来ちゃだめなのよ・・・』

デューン

『僕後継者？わかんないけどお姉ちゃんのゆうこと聞く』

???

『そつよ！絶対に可愛いデューンを後継者なんかにしらないんだから

！』

・・・

いやさ・・・テールが竜神グランドの悪口言っちゃだめだろ・・・

デューン

『そろそろレスキル来るかな？』

???

『ああ・・・レスキル様か・・・あの可愛げもない奴か・・・』

デューン

『レスキル嫌い？』

???

『違うけど・・・。ハア、キラー様は真面目過ぎるし、スラウは可愛くないし・・・心の癒しはデューンだけなのよ、レスキルみたいにグレないでね？』

デューン

『わかった、僕いい子になる』

何！？この謎のテールはイークルズか！？

プラネン

『お前らイークルズだったのか!』

???

『キヤア!・・・ゴホン、我はイークルズの・・・貴様はプラネンか!!』

誰だよ・・・今更威厳は回復しないし、テールの外見なんてみんな同じに見えるから個人差がわからない。

プラネン

『誰だよ・・・』

???

『我を忘れたのか!愚かな輩め!』

プラネン

『テールの外見の判別なんて出来ないって・・・』

ズドン!!

空から他のテールが突っ込んで来たため避けるとそのテールは地面にのめり込んだ。

???

『レスキル様ー、今からわたくしめが助けに参ります!』

また違うテールが走ってやってきて、埋まったテールを引っ張り出している。

レスキル

『キャハハ！お前がプラネンかやり合おうぜ！』

地面から出てきていきなりかよ・・・

????

『いけません！レスキル様はもう少しおしとやかになって下さい』

レスキル

『ああ？クロウうるせえぜ？』

クロウ

『わたくしめはレスキル様の執事を勤めさせて頂いています、ラウル・クロウと申します』

クロウはレスキルを無視して挨拶してきたが・・・

プラネン

『えーと・・・』

レスキル

『なんだよクロウ、てめえは敵にも挨拶すんのかよ』

クロウ

『当たり前です。それは執事としてのわたくしの仕事』

レスキル

『つまんねー、それより人間狩でもしようぜ！キャハハ！殺し合おうぜー』

デューン

『レスキル、僕忘れられた？』

レスキル

『そんな訳ねえだろ！せつかく弟に会いにきたんだからな！』

???

『レスキル！貴様が後継者になればデューンは自由なんだ！イークルズなんてやめてさっさとグランド様の所へ帰れ！』

レスキル

『ああ？グランドは生きてんだからまだいいだろ？しつこいぜレル』

レル？聞いた事あるな・・・

レル

『まあいい、我はデューンを守るだけだ！』

レスキル

『キャハハ！まだ姉の代わりをやってんのか？』

レル

『チツ、我はいったん帰る。その空気をなんとかしろ』

レルはどっかに飛んで行った・・・空気って俺？

クロウ

『すみません、プラネン殿。わたくしめではレスキル様の暴走を止められないのです・・・』

プラネン

『お前も大変だな．．．こっちもリケなんつう凶悪魔法使いがいて大変なんだ．．．』

クロウ

『ご苦労様です、わたくしめも精進しなければ．．．』

プラネン

『お前もがんばれよ．．．』

しかし、イークルズとは敵対してたはずだが．．．何故こうなった？

レスキル

『キャハハ！話が終わったら狩に行くぜ！』

レスキルは凄い勢いで．．．

ドゴン！

岩盤に埋まった．．．

クロウ

『レスキル様ー！！』

プラネン

『ハア．．．』

ため息をつきながらリケの所へ歩いて行く事にする。

ミラーワールド 26話

リケ

『ゴクゴク・・・』

リケはあの薬という名の血を飲んでいいる。あいつは呪いのせいで内臓が潰れている、何とか栄養剤と羽族の守りによる痛みの緩和で辛うじて生きている状態だからな・・・

リケ

『血生臭い・・・』

プラネン

『当たり前だろ！』

まったく・・・。呪いを解除すればいいのだが、黒族の羽族に対する憎しみがこもったこの呪いは解除すると他の羽族に移るらしい・・・

呪いの媒体は輪でリケの体を縛り縮む、身体に金属の輪が食い込んでいるらしい。殺さず苦しめて解除させ被害を広める呪いか・・・

リケ

『何ボケッとしてんのさー？』

プラネン

『おっと、わりい』

レスキル

『キャハハ！ぼーっとしてると・・・殺すよー！』

ズドン！

身の危険を感じとつさに後ろに避けると・・・空から突っ込んできたレスキルが地面に埋まった・・・

クロウ

『レスキル様！』

クロウは一生懸命レスキルを引つ張りだしている

レスキル

『何で避けんだ！』

プラネン

『避けないと身体に穴が空くからだろ！』

レスキル

『そんなこたあしらねえよ！キャハハ！』

ズバ！

プラネン

『・・・クツ』

レスキルは爪で左腕を切り落としてきたが、避けられ無かった・・・

レスキル

『キャハハ！左腕もらっちゃったぜ！』

レスキルは落ちた俺の左腕を掴み・・・

ガブツ　グジャツ！

食いやがった・・・

プラネン

『グロツ！ブラックハード闇魔法』

レスキル

『キャハハ！無駄だぜ』

飛んで来るブラックハードも関係なく真っすぐこっちに突っ込んできた！

プラネン

『やべえ！』

レスキルを避けるとそのまま・・・

後ろの岩盤に埋まった・・・

クロウ

『レスキル様！今助けに参ります！』

プラネン

『行かせるか！ライト光魔法』

ピカッ！

クロウ

『目がー！？』

急の光に驚いて倒れるクロウ・・・色々がんばれ・・・

レスキル

『キャハハ！！技』
テイルプレス

いつの間にか復活したレスキルが岩盤にプレスを使っている

ジュウジュウ・・・

岩盤が溶けて溶岩になったと！

ブラネン

『リケは守り中心で』

リケ

『わかってるよーとりあえず頑張っ
てねー光術』
ゲロースバリア

リケはバリアの中にこもる事にしたか。

レスキル

『キャハハ！キャウ？キシヤー！！』

完全に理性がない・・・

カキッン！ カキッン！

レスキルの爪攻撃を剣で反らすが・・・レスキル力強すぎだろ！

ガブツ！

プラネン

『何！？』

右腕を噛みちぎられた・・・やばい

レスキル

『ギャー、ギャウ？キャハハ！！』

ガブツ！ グジャツ！

うわー、現在進行形で食われてる・・・

リケは既に姿をくらましたし・・・どうしよ

デュラン

『そこで！正義のヒーロー現れる！！』

デュランお前はヒーローか？だけど喉を食われてしゃべれない・・・

レスキル

『ギャア！！』

デュラン

『くらえ！大車輪！』

レスキルの尻尾を掴みぐるぐる回して・・・

ポイー・・・・・・・・

レスキル

『ギャー・・・・・・・・』

デュラン

『フツ・・・悪は滅びた……。プラネンさあ、グロイんだけど？』

プラネン

『まだ再生途中なんだよ！』

デュラン

『それより、何でイークルズの基地のあるチアルビに送ったのに罠に釣られてここに来ちゃうの？馬鹿なの？死ぬの？』

プラネン

『死なねえよ！』

デュラン

『もういいや、飽きたからこれあげる。バイバーイ』

これって・・・ノズインダの鏡？

ミラーワールド 27話

ーミツケタ、カタワレハヤクモリニキテヨ

夢か？まあいいや

今は世界ノズインダの町で足りない物なんかを補充している、ユア
タウやフェシオダと違い結構寂れているな・・・

リケ

『とりあえずは大丈夫そうだねー』

プラネン

『大丈夫な訳ないだろ・・・』

資金はどうしたかと言うと・・・まあ、黒族の血を・・・

リケ

『黒族の血は結構高く売れるからねー』

プラネン

『こんな事するくらいならチアルビで魚でも釣っておけばよかった。
・・・』

実は薬として使う黒族の血は貴重品だ、何せ作るために黒族の血の
閻属性を羽族が光の力で打ち消す必要がある。それには問題が二つ
あって一つは羽族と黒族の仲が悪い事と属性を無にするため光の力
の強さを調整する必要がある事だ。

それに比べ、俺は自分一人で両方の事が出来るため調整も楽に出来
る。

リケ

『数日はここに居る事になりそうだしー、資金をある程度持ってた方が賢明でしょー』

プラネン

『もういい、めんどくさい』

何だかんだで結構滞在している、カクタや時折来るファイバーなんかと雑談したりするが、どうやらこの世界にあるイーグルズの工場が稼動しているらしい、今は様子見だ

リケ

『町に行こうよー飽きたー』

プラネン

『めんどくさい』

リケ

『・・・風魔法（ウインド）・・・』

プラネン

『わかったよ！行けばいいんだろ！』

リケ

『よろしい、行くよー』

プラネン

『ハア・・・』

宿の外に出ると何だか珍しく賑やかだな・・・

カクタ

『イークルズ！あの工場でどうするつもりだ！』

ガニメデ

『イークルズなんて名前じゃあないよ』

テトラス

『レイ・テトラスだよ』

ガニメデ

『レイ・ガニメデだよ』

カクタ

『フツ、ごまかそうとしても無駄だ！』

何かこの三人が言い争いをしているみたいだ

ガニメデ

『ごまかすの？』

テトラス

『失敗したね？』

ガニメデ

『どいつする？』

テトラス

『このあと？』

カクタ

『さっさとお前らの計画を言え!』

ガニメデ

『計画を』

テトラス

『言うなんて』

ガニメデ

『事は』

テトラス

『しないよ』

カクタ

『それなら力ずくだ! サンダーベイン雷魔法』

ガニメデ

『暴力は、アイスヘイル岩魔法』

雷は土の壁で防御されたか。

テトラス

『いけないよ?、ウォータープレス水魔法』

高圧の水を土の壁に発射している。

グチャー

カクタに大量の泥が！

カクタ

『ギャー！』

カクタよ、ご愁傷様

ガニメデ

『帰ろう』

テトラス

『工場に』

ガニメデ

『バイバイ』

テトラス

『バイバイ』

あの二人は工場の方に向かっていった・・・

プラネン

『カクタ大丈夫か？』

リケ

『うわっ汚いー、火魔法^{ヒート}』

高熱で泥を乾燥させている

ジュー・・・

カクタ

『アチい!!!?』

プラネン

『大丈夫か・・・』

カクタ、火傷してないか？

カクタ

『大丈夫さ、今頃ファイバーが工場のロックを解除してるだろう。では、さらばだ!』

カクタは凄いい勢いで工場に向かっていった・・・

プラネン

『リケ行くか?』

リケ

『プラネン行ってきてー』

リケはまだ町を見ていたらしい・・・

プラネン

『わかったよ・・・』

何か疲れた

ミラーワールド 28話

今工場の所に着いたところだ、入口にはファイバーが立っている。

ファイバー

『おや？プラネンですか？入口なら開けておきましたよ』

プラネン

『閉まっていたのか？』

前回開いてなかったか？

ファイバー

『閉じてました。まあ、ある程度なら機械仕掛の扉なんて開けられますがね』

ファイバーはあまり魔力を持っていないためか機械に関する知識が豊富だ、どうやって勉強したか知らないが・・・

プラネン

『とりあえず、中に入ってみるか』

ファイバー

『気をつけてください』

工場の中は前回とあまり変わらない・・・

カクタ

『・・・』

前言撤回、カクタが気絶して落ちてる。

ガニメデ

『待ってたよ』

テトラス

『プランネンさん』

ガニメデ

『地下室で』

テトラス

『ネーグルが』

ガニメデ

『待ってるよ』

・・・何この二人

プランネン

『そんなやすやすと敵の言いつつじりになるとでも思ってたのっ』

ガニメデ

『うん』

テトラス

『もちろん』

プラネン

『そんな馬鹿な事を・・・』

パカッ

プラネン

『えー！！！？』

ヒューン・・・

床に穴が開いて・・・

ドスン！

プラネン

『いてえ！』

ネーゲル

『フッフッフ、俺はフレイ・ネーゲルだ！』

プラネン

『しらねえ』

ネーゲル

『そこは空気読め！まあいい、勝負だ！プラネン！』

何だよ、この白衣の男は？

プラネン

『まあいいや、受けてやる！』

ネーグル

『ならば、俺のレーシングカーを見せてやるっ！』

ネーグルは何かスイッチを押すと・・・

空中に浮いた鉄のでかい箱が？

プラネン

『えーと』

ネーグル

『これぞ正しく、リニアモーターカー！工場内の磁力を利用して浮かせている、この車ではなく工場の磁力を操作することにより動かすため車自体の軽量化に成功！工場内と言っ欠点はあるが速度は申し分ない！将来は大地を鉄で固めてこの車を広めるつもりだ！その前段階として・・・』

話なげえ、何だよこいつ

プラネン

『結局なんだ！』

ネーグル

『昨日レースのゲームをしたら・・・』

プラネン

『したら？』

ゲーム？よくわからないけど

ネーグル

『リアルでレースしたくなつた!』

プラネン

『・・・』

えーと、レースって競走だよな?それがしたいって理由で呼ばれたのか・・・ふざけんな!

ネーグル

『さあ!君のレーシングカーを出しなさい!』

プラネン

『あるわけないだろ!』

そんな物どうやって持ってくんだよ!

ジダイガ

『ならば私の車を貸してやろっ』

プラネン

『うわっ!・・・何だよジダイガか』

急に現れるジダイガ、心臓に悪い!

ジダイガ

『これでいいだろ?』

ジダイガは空間を割り鉄の箱を呼び出した

ネーグル

『軽トラじゃないか・・・』

ジダイガ

『中古で買ってみた』

ネーグル

『ふーん、運転出来るの？』

ジダイガ

『もちろん』

ネーグル

『ならばレースだ！』

ジダイガ

『がんばれプラネン』

結局俺か！

プラネン

『何だよどうやるんだよ？』

ジダイガ

『貴様らと違い私は忙しい、そんな遊びには構っていらねん、適当にやれ』

乗ってみるが動かし方がわからない。

ネーグル

『工場を一周だからな？よいどん！』

ヒューン！！

凄いスピードでネーグルのくるま？が空を飛んでいる。
いい加減動け！

ガタガタ、ブーン！

おっ、何か動き出した！

・・・

アレ？何かもう目の前にゴールが？

プラネン

『勝っちゃった？』

後から来たネーグルが

ネーグル

『マジで軽トラか！？』

ジダイガ

『空間操作機能を取り入れたただけだ』

ネーグル

『マジかよ・・・』

ネーグルは落ち込んでいる・・・

プラネン

『結局この工場は？』

ネーグル

『キラーの工場をもらって趣味で遊んでる』

プラネン

『・・・放置でいいか』

ネーグルもイークルズらしいが・・・大した活動はしていないらしい、むだ足か・・・

ジダイガ

『車をしまうついでに貴様も町へ送ってやるっ』

ついでかよ、まあいいや・・・

ネーグル

『疲れたな、寝よ』

何か人それぞれ好き勝手を・・・

ーボクハマツテルヨ

何だっただんだっけ？

ミラーワールド 29話

町に戻るとたくさんの死体が散らばっている、その中心にはリケが・
・？

プラネン

『リケ？』

リケ

『違う！違う！私じゃない！』

プラネン

『おい！落ち着け！』

リケ

『来るなあ！！何を間違えた！？クロリア答えてよ！！もう人殺し
にはなりたくない！！！！』

プラネン

『何を言ってるんだ？』

リケに少しずつ近寄ってみる・・・

リケ

『近寄るな！これ以上来るな！！！！光魔法』
バッドエンドシャイン

パキン

リケの腕輪が壊れ辺りを光で包む・・・

あの腕輪は光の力を封印するものらしいがそれが壊れ光の力で溢れているこれが本来のリケの力が、なんで封印なんてしてんだよ？

光輝きとても眩しい

プラネン

『クツ・・・』

光が止むと・・・

特に変化はなさそうなんだけど・・・

リケ

『何で！何で！何で！何で！』

リケは余計に混乱している・・・

プラネン

『一体何をしたんだ？』

リケ

『魂を浄化して消滅させたはず！！？何で生きてるの！！？』

プラネン

『よくわからないが、いい加減落ち着け。魔力も切れただろ？』

リケを包む光の魔力が弱まっている、明らかに魔力切れでリケはフラフラしている

リケ

『来るな！近寄るな！！強化』

ブローケンリミッター

莫大な魔力がリケを包む

プラネン

『強化だと！？なんてものを使うんだ！』

強化とはただ単に限界を取り払い無理矢理能力を強化するもので、精神に影響を与えるため禁忌の一つなんだ

リケ

『来るな！来るな！来るな！来るな！』

ただその言葉だけで風が吹き荒れ後ろに押される

プラネン

『くそっ！おとなしくしろ！ブラックハード闇魔法』

リケ

『強化（約束された償い）』

リケは身体強化をするとブラックハードを走って避ける

プラネン

『いい加減にしろ！ダークヘル闇魔法×4』

闇の塊を4つ打ち出すが全てを避けられる
身体強化のせいでやたらに速いな

リケ

『近寄るな!!』

プラネン

『だからどうしたんだよ!』

リケ

『お前にはわからないだろ!! 憎い力で全てを浄化してやる!! 光バッド
魔法エンドシャイン』

光が世界を包み込む・・・

・・・

リケ視点

浄化の力は聖なる力と言われた・・・でもその力で人を殺してしま
った。

人は清い物では無いんだ、全ての人に悪意は備わっている、だから
浄化は人を消す。

ある日クロリアに会った。

クロリアは『その力が憎いなら封じてあげるわよ?』
といい封印の腕輪をくれたあと、

『この選択が間違っていないければ良いわね』と言った。

前にジダイガが上から目線で話を始めるのだから脅したら、
『なかなかの虚栄心だ。いや、恐怖心か？』と言った。これは私に
言った言葉ではない、今でも苦しめる私の呪いについて言った言葉
だ。

私の呪いは羽族の虚栄心とそれに対する黒族の恐怖心が作り出した。
そして浄化を使う私が恐怖の対象と言う事か。

ジダイガは全て把握しているぞ？と伝えたかったのだろうか？

プラネンは初めて会った時、いきなり脅しても冗談ととらえるばかりだったな、普通は穴だらけにして内臓を引っ張り出せば逃げ出す
と思ったんだけどな・・・

まあいいや・・・

ミラーワールド 30話

なにやら声が聞こえる・・・

ジダイガ

『プランンは間接的に、リケは直接、ハールの影響を受ける事になるとはな』

ペール

『カカカ、プランンハアマリエイキヨウナイダロ』

ジダイガ

『混沌の化け物にプランンの存在を伝えただけが・・・調和と混沌は対立と秩序に対して行動を起こすだろ』

ペール

『ワカラナイナ、バルカルワカルカ?』

バルカル

『・・・』

ペール

『ナンカハナセヨ』

ジダイガ

『とりあえず二人共ご苦労、被害はないようだ』

ペール

『カカカ、アトハデュランカ?』

ジダイガ

『まさか奴が協力してくるとは予想外だが、誤差の範囲内だ』

ペール

『オマエトンデモナイヨナ、イッタイナンニンヲコマニシテルンダ？』

ジダイガ

『秘密だ、私の目的は記憶を取り戻す、そのためなら方法は問わない』

ペール

『マアイイヨ、プラネンガソロソロオキルダロウカラバルカルツレテカエルヨ』

・・・

ここはどこだ？

ザバーン！ ザバーン！

ジダイガ

『やっと起きたか、あの程度で気絶か？愚かしいな』

プラネン

『ジダイガ！？』

起きると目の前にはジダイガが居るし、何か海の音？チアルビか？

ジダイガ

『とりあえず、世界チアルビに送っておいた。ノズインダでの事は気にするな』

やっぱりチアルビか、ノズインダ？・・・あ！そういえば！

プラネン

『リケは大丈夫なのか？』

ジダイガ

『気にするな、それより貴様はこの世界のイークルズのダミーを潰しとけ、後はロウティバのイークルズもどきを潰せ』

プラネン

『何だよそれ・・・』

ダミーとかもどきとか結局はイークルズは一つって事か？

ジダイガ

『ダミーのリーダーよりバグドル・シルガに気をつける』

シルガだと！？確か英雄の弟で犯罪者なんて話を聞いたぞ？

プラネン

『シルガなんて無理じゃね?』

剣の扱いも魔力や風の魔法も最強クラス、更に盗んだ?トルヴェザ
クロスなんて最強の封印武器まで使う、無理だ

ジダイガ

『シルガは無理なのはわかっている。後はロウティバの方のリーダー、テラ・フォトン。こいつも無理か』

プラネン

『無理だよ!?!』

テラ・フォトンは珍しい呪文使いたが、普通に呪文省略を使っらしい、だから無理だ!!

ジダイガ

『とりあえず頑張れ。それと、忘れるな私は中立だ』

ジダイガは空間を切り裂きどこかへ消えた・・・。

・・・

ジダイガ視点

私は盤を創りその上で駒は踊る、私は指揮者であり傍観者。

私を利用するのか？トルヴェザと協力者よ、ならば踊って見せよう愚か者の様に。

貴様の臭い芝居など私には無意味、盤上を誘導するかの如くか。

ならば、誘導されてやろう私の盤で。

傍観者は私だ、踊れ踊れ神は裏から動かすか？裏から見れば表が裏だ。

操り人形はどちらかな？

リアルワールド 外伝5

路亜視点

路亜

『美和さん居ますか？』

美和の研究所に遊びに来たが返事がない、とりあえず中に入りますか

美和

『……』

美和さんはこたつで寝ていた、この人は睡眠も栄養もとる必要はなく、さらに老化もしないと言う人外ですが……寝てる時は穏やかな顔を……

美和

『……逃げても無駄よおー……あなたは実験体になる……スウスウ……』

物騒ですよ！全く、美和さんは外見は若いですが実は私より年輩なんですよ。因みに私の外見はおじさんの入口付近……ん？

美和

『……逃がさないわよお……スウスウ……』

路亜

『まだ夢を見ているんでしょうか？』

美和

『・・・路亜あ・・・スウスウ・・・』

私！？私ですか！？美和さん何を考えているんですか！？私に何がしたいんです！？

路亜

『・・・気のせいですよね』

美和

『ふあー、・・・路亜？いたのお？』

路亜

『はい、居ました』

美和

『面白い夢を見たわ』

路亜

『そつでございますか』

美和

『そつねえー、私が路亜を・・・路亜？』

逃げ出した私は悪くない、悪くないんです

・・・

美和

『路亜あー、逃がさないわよおー』

はい、どうしても怖いのです

ミラーワールド 31話

プラネン

『まずは情報を集めるか……。めんどくせえ』

ーデモジユウヨウダヨ

わかってるけどさ……。頭を使う事は苦手なんだよ、とりあえず町をふらふらしときゃあ誰かいるだろ。

イール

『フフフ、どうもーす。プラネンさん？』

居たよこの世界の管理者が……。水の魔法使いのガル・イールが。
。
うぜえ

プラネン

『何だよ、お前には用は無いんだけど？』

イール

『フフフ、イークルズの基地の場所なら知ってまーす』

プラネン

『本当か？じゃあなんで駆除しないんだよ？』

イール

『それは……。』

プラネン

『わかったから案内しろ』

イール

『了解です』

イールは世界の管理者と言っても実力不足、多分ファイバーと同じベルじゃねえか？

・・・

町の外れに小さな小屋が・・・何だよこりゃ

プラネン

『小屋の中は地下への階段しかねえぞ？』

イール

『その地下が広いのです』

プラネン

『へー』

地下へ行くと・・・何でお前が居るんだよ？

ペール

『カカカ、プラネンマチクタビレタゾ』

イール

『なんですかー、この不気味な人形は？』

プラネン

『ジダイガの部下だよ』

ペール

『カカカ、バルカルハステニチケイノゲンエイラツカッテカラタイ
サンシテルゾ』

ああ、だから警備とかいなかったんだ。
奥では混乱状態になっているんだろうな。

プラネン

『とりあえず進もうか』

ペール

『ダレカチカツイテキテイルゾ？』

カツ カツ

足音が近づき目の前に現れたのは・・・

プラネン

『シルガ！？いきなりかよ！』

目の前には後ろに巨大な十字架を背負った？バグドル・シルガが。
因みに、シルガの首、右手首、右足首は手錠の様な物で十字架に繋がれている、左手首、左足首にも繋がれていた形跡はあるがどうやって手錠みたいなのを壊したんだ？

左手には十字架を象った剣ウインドクロスを持っている。

イール

『ヤバいのが来ましたよ?! 水魔法^{アクア}』

イールは水の竜巻をシルガに向かわせるが・・・

シルガ
『^{ウェイブ}剣技』

シルガは剣を振っただけで竜巻を切り裂き、風圧でイールを吹っ飛ばす。

イール
『ぐふっ・・・』

イールは動かない、やっぱり足手まといか。

プラネン
『何をする気だ!』

シルガ
『ここは何処なんだ? 何処が出口だ?』

プラネン
『ハア!?!』

シルガ
『何か知らない内にこんな所に来てしまった。チアルビを散歩していた筈だが・・・』

プラネン
『ここもチアルビなんだけど・・・』

シルガ

『本当はイズンプでスメリアと決闘する予定だったのだが・・・』
もしかして、最強の剣士が迷子？

プラネン

『それならここに・・・』

シルガ

『仕方ない、出口を探すか』

と言って奥へ走り出すシルガ、出口はここだよ？

プラネン

『オーイ！待てよ！出口はここだよ！？』

ペール

『カカカ、イッチマッタナ』

何で出口からドンドン遠ざかるんだよ！？わざと？わざとなの！？

ミラーワールド 32話

結局シルガを見失った。わざとか!?

ペール

『カカカ、ドウスンダ?』

とりあえず、地下を歩いているが・・・がらんとしてる。

プラネン

『とりあえず、ここのリーダーを倒しゃあいいんだ!』

ータンラクテキダネ

当たり前だろ?それで終わり、簡単じゃねえか。

プラネン

『何か行き止まりみたいだけど・・・』

道を間違えたか・・・

ペール

『イヤ、コノサキニモノオトガスル』

プラネン

『隠し扉でもあんのか?』

確かに怪しい行き止まりだ・・・多分。

そしたら、行き止まりが開いて・・・

カリスト

『我が名はロトユ・カリスト。仕掛けを見破られたか、だが我が刃の錆にしてくれる!』

プラネン

『望むところだ!』

剣を構え・・・

カリスト

『機械兵起動せよ!』

プラネン

『ハア!?!』

沢山のきかいへいが現れた・・・

機械兵

『ギギギ・・・』

きかいへいは剣を振り下ろす、

後ろに飛びのき

プラネン

『ウェイブ剣技』

正面のきかいへいを倒す

機械兵

『ギギギ……』

今度は左右から剣を突いて来る。

プラネン

『調和術（人間の欲望大地からの対立心）』

範囲を最小にして自分だけ空に浮く。左右のきかいへいは剣で突き合い自滅。

パール

『カカカ、ヤルジヤネエカ』

プラネン

ブラックハード
『闇魔法』

ドカーン！

カリストの正面に居るきかいへいをあらかた吹っ飛ばす。

カリスト

『何！機械兵が！』

パール

『アトハマカセナ、操作（首吊り自殺の貫き人形）×4、操作（水没自殺の灼熱人形）×4』

パールは剣を持つ人形と火を吐く人形を呼び出しきかいへいを抑え

る。

プラネン

『カリスト！覚悟しな！』

カリスト

『この先には通す訳には……』

剣を振り下ろすとカリストは剣で防ぐ。

カキン！ カキン！

剣の打ち合い、確かにカリストは結構やるな

プラネン

『剣技（二連撃）』

カッ カキン！

カリスト

『うぐっ！』

カリストは重い連続攻撃にのけ反る

プラネン

『ダークヘル
闇魔法』

バコーン

カリスト

『ぐあーー』

カリストは奥へと吹っ飛ばし、

ブラネン

『行くぞペール』

ペール

『カカカ、カタツイタトコロダ』

そして進む・・・

ミラーワールド 33話

アーサ

『ようこそプラネン！私がこのリーダーだ！実際は雇われ傭兵だけどね』

プラネン

『じゃあダミーってのは……』

アーサ

『もちろん、本当の事だ、イークルズのダミーさ』

何だよ、ジダイガめ知ってたな！

ペール

『プラネンバカダナ……』

アーサ

『では戦おう！正々堂々と！』

プラネン

『じゃあ、後ろの機械は何だ？』

アーサの後ろにはでかい機械が置いてある。絶対怪しいだろ！

アーサ

『確か（マシンリープロダクション）だっけ？』

プラネン

『聞いた事あるな・・・』

何だっけ？ 忘れた。

ペール

『アキレルナ』

うるせえペール！

アーサ

『これを使えるのはカリストなんのだが、私は使えん！』

プラネン

『うわー何かいばってるよ』

ペール

『ドツチモドツチダナ』

ーフタリトモバカミタイ

だからうるせえ！！

アーサは剣を構え

アーサ

『悔いのない戦いにしようか！ 剣技』
ウェイブ

プラネン

『覚悟しな！ 剣技』
ウェイブ

衝撃波は相殺か。相手はロトユ・アーサ、最強の傭兵で魔法も属技も使えなくてもかなり強く、シルガに一撃加えた事があるなんて話も聞いた事があるくらいだ。

ブラネン

『剣技（二連撃）』

重い連続攻撃でアーサをのけ反らせる

ブラネン

『ダイクヘル
闇魔法』

闇の塊を打ち出す。

アーサ

『まだまだ！剣技（一方両断）』

スパツ！

アーサはすぐに復帰してダイクヘルを切り裂き回避したか。

ブラネン

『やっぱり強いな！』

アーサに向かって剣を降ると、

アーサはジャンプして避け剣を振り下ろしてくる

ペール

『操作（名誉自殺の身代わり人形）』

アーサの剣は盾を持った人形により阻まれる

プラネン

『邪魔するな！』

これはアーサとの真剣勝負だ！

ペール

『アツクナリヤガツテ・・・』

アーサ

『さあ！再開だ！剣技』
ウェイブ

プラネン

『リンクバリア
光術』

衝撃波をバリアで守る、

プラネン

『ライト
光魔法』

ピカッ！

アーサは一瞬目をつぶり・・・

プラネン

『ブラックハード
闇魔法』

ドカーン！

アーサ

『なかなかやるな・・・』

アーサは瞬時に後ろに飛びのき衝撃を軽減したのだから既にボロボロだ

プラネン

『終わりか？』

アーサ

『まださ！剣技（二連撃） 剣技（舞撃）』

カキッ！ グサッ

プラネン

『チッ！・・・』

・ 二連続の攻撃を防ぐと弾かれた勢いに乗り剣を回転させ斬られた・・・

アーサ

『剣技（威圧の波）』

ガッン！

アーサは剣を振っただけで吹っ飛ばして壁にぶつかった。

プラネン

『痛てえ！』

アーサ

『最後だ！剣技（一方両断）』

アーサは一気に近づき剣を振り下ろす

グサツ！！

プラネン

『負けはお前だ！』

アーサには突き出した対極剣が刺さっている・・・

アーサの剣はとっさに取り出した（サーヴェルドブック）で防いだ

アーサ

『負けか・・・じゃあなプラネン』

アーサは剣を落としその場で倒れた

アイザック

『ここは任せて下さい』

プラネン

『うわっ！いつの間に来た！』

いつの間にかヤブ医者か部屋の中にいる

アイザック

『（いやーまさか欲しかったマシンリープロダクションが手に入るなんてね）怪我人を治療するのは医者役目ですから』

プラネン

『まあいいか・・・』

アイザックが素直に治療するとは思えない。何せ裏では人の改造をしてるなんて話もある。アーサ大丈夫か？

ペール

『ソロソロモドロウヨ、モクテキハタツセイシタダロ？』

プラネン

『それもそうだな・・・』

後の事はアイザックに任せて地上に戻る

ペール

『カカカ、ソレジャアナ』

ペールはどっかに消えた。疲れたし宿屋に行くか

・・・

あれ？誰か忘れた？

イール

『おや？、だれもいません』

ミラーワールド 34話

夢を見た・・・

場面は二人の人間？がテーブル？の上に乗った（サーヴェルドブック）を見ている。この二人も一冊づつ持っている。

サーヴェルド

『どうしたものが・・・』

ロット

『神は絶対に見捨てるなんて事はしません！』

何でこの二人？しかもテーブルの上の本に話ている。頭大丈夫？

?????

『お前らを創る時に間違えて創られただけなんだから！消すんなら消せばいいだろ！何年も眠らせておいて今更なんだよ！』

本が話し出すだと!?

しかも何か怒ってるし

ロット

『ですから、今更あなたを消すなんてできないんですよ』

サーヴェルド

『とりあえず記憶を封印・・・』

?????

『させるかよ！調和術（憎む人間の・・・）』

本は勝手に開き、本の中から15歳ぐらいの少年が出てくる。すげえな！でもあいつ何か見覚えが・・・

サーヴェルド

『仕方ない・・・（閉じる）』

サーヴェルドの一言で本は閉じ、調和術を使おうとした少年も消えた

ロット

『神よあの少年にせめての安らぎを・・・』

サーヴェルド

『封印はグドクに任せるか・・・』

次の瞬間には二人の姿はなく、サーヴェルドブックが3冊残るだけだった・・・

・・・

プラネン

『目覚めわりー……』

何だよあの変な夢……

ああ、そういえばバルカルが残したダルミトの鏡があったな……

プラネン

『たまには行ってみるか!』

荷物からダルミトの鏡を取り出す……、そういえば、アークが置いてった鏡もあったな

宿屋の代金を払った後、鏡を使いダルミトに向かう

プラネン

『相変わらず暗いな……』

霧のせいで見渡しが悪い

リーガル

『オーイ、プラネン誰か探してんのか?』

こいつはトロイ・リーガル。ダルミトによく住めるよ、一応ジダイガの部活って事になるのかな?

プラネン

『うーん……、ジダイガはいるの?』

とりあえず、ジダイガの所へ行ってみるか

リーガル

『ジダイガならここには居ないぞ?』

プラネン

『え?ジダイガってこの世界の管理者だろ?』

管理者ならこの世界で管理するべきだろ?なんで居ないのさ

リーガル

『ジダイガは管理者だけどそれは名ばかりなんだよ』

プラネン

『名ばかりかよ!』

リーガル

『実際は管理してるなんて話はあまりないよ』

それは管理者と言えるのか?

ーベツニイインジャナイ?

そうは言ってもな・・・

リーニヤ

『兄さんどこ・・・』

トロイ・リーニヤが兄であるリーガルを探しに来たようだ、名前が安易な気がするの気のせいかな?

リーガル

『プランネンすまないな、リーニヤが呼んでいる』

そんなこんなでリーガルはどっか行った。

・・・

もう一つの鏡はロウティバか・・・一人はさみしいな・・・ハア

ミラーワールド 35話

ーヤットアエルネ

今は世界ロウティバにいる、この世界はほとんどが森に覆われている、とりあえず村に向かうか

ゼイク

『待てよ、お前もフォトンの仲間か?』

どこからか声が聞こえる

プラネン

『誰だどこにいる!』

ゼイク

『僕の名前はバグドル・ゼイクさ、お前の上に居るよ』

プラネン

『はあ?』

上を見上げると木の枝にゼイクが立っていた

ゼイク

『で?フォトンの仲間か?』

プラネン

『違うな、ところでフォトンはどこにいる?』

ゼイク

『森の奥に巨大な風車があるんだけど、そこにフォトンが居るよ』

おっと、いきなり情報ゲット、とりあえず村に向かうつもりだけどな

プラネン

『ありがとなゼイク』

ゼイク

『別にいいけど？』

それにしても、何でゼイクはフォトンに敵対視してたんだろ？
まあいいや、村に着いたし

ロド

『なんじゃあ？トラメルいい加減に・・・』

トラメル

『なんでだよ！何かでかい風車ができたんだ！面白そうたる！』

・・・何か村の入口で言い争いが見えるんだけど

ロド

『全く、諦めるのじゃ』

トラメル

『せっかく面白そうなのにー、じゃあヴァトウズの氷の洞窟・・・』

・・・

何だよ。あのトラメルって奴は、そこまで危険に突っ込みたいのか？しかも面白そうって・・・

因みに氷の洞窟はかなり危険らしい

ーームシスレバ？

そうだな、無視して薬屋にでも向かうか、別にいらないけどな

レスキル

『待てよてめえら、ついて来るな！』

薬屋の近くに、何かテールが二人と魔族の子供が二人、因みにテールは何か嫌がっている

クロウ

『流石レスキル様、魔族の子供にまで懐かれるとは、わたくし感激です』

レスキル

『クロウ！？助けるよ！柄じゃねえぜ！？』

あのレスキルとクロウかよ、何でここに？

スランカ

『どらごんかわいいね』

カラクト

『だいじょうぶなの？ぼくすこしこわい』

スランカ

『だいじょうぶだよ、どらごんいいこだから』

何この状況、あのレスキルが5歳くらいの子供に押されっぱなしなんだけど

クロウ

『おや？プラネン殿ではありませんか、この光景を見て素晴らしいと思いませんか？素晴らしい流石レスキル様・・・』

プラネン

『・・・まあ、いいんじゃない？』

レスキルは子供を相手に戸惑っているようだな

カラクト

『スランカこわくないの』

スランカ

『だいじょうぶなの、カラクトこわがりね』

カラクトとスランカか。それにしても、スランカさんの度胸には脱帽するよ

レスキル

『・・・てめえら、ドラゴンの恐ろしさを教えてやるよ！キャハハ！プラネン相手しろ！』

苛立ちが最高潮に達したのか？レスキルは爪を使い攻撃してくる、全く八つ当たりか？

カキツン！ カキツン！

剣で攻撃を防ぐが攻めきれない、力の差が酷いな。魔法や調和術を使う訳にはいかないし

プラネン

『マジかよ、八つ当たりだろ！』

カラクト

『・・・』

何かカラクトが無言になるんだけど・・・

レスキル

『どうだ！ビビったか！キヤハハ！』

カラクト

『どらごんさん、かつこいい・・・』

バタン！

レスキルはずっこけた、子供の状態でドラゴンを倒すとは恐るべし

クロウ

『レスキル様、素晴らし過ぎる。わたくしは貴女様に仕えさせてもらい光栄です！』

レスキル

『違う・・・何が違う・・・』

レスキルのキャラ設定がガラガラと崩れ落ちているようだ
三人してレスキルの精神に攻撃しているな

スランカ

『カラクトそろそろおうちにかえる?』

カラクト

『うん!ばいばい、どらごんさん』

残されたレスキルは地に倒れ、クロウは絶賛の嵐を起こしていた。
関わりたくないのどこっそりと村から出る……

ームダアシ?

言うな!

...

...誰?

ミラーワールド 36話

プラネン

『風車がやたらと大きくて助かったな』

今は森の中を風車に向かって歩いてる。そういえばあの子供スラ
ンカとカラクトは親が病死してグドクと名乗る男が引き取るのだと
ロドというじいさんが言っていた

グドクって言ったら始まりの黒族じゃないか、よく知らないけど何
か最初の黒族らしい、確かグドク、ガバル、セイリユウという三人
だったはず、

因みに始まりの羽族もいて、ポイズン、ヘラルク、テラートの三人

ーチカイヨ

風車はすぐ近くに見えるが・・・風車のそばに四人誰かが居る

ブレイク

『・・・やっと来たか』

プラネン

『誰だ？』

会った記憶はあるんだけど・・・誰だっけ？

テル

『アハハ、ブレイク忘れられちゃったみたいだね』

ブレイク

『黙れ、テル』

ブレイクとテルか、思い出したよ。残り二人は？

ドル

『俺はフレイ・ドルだぜ』

ソラ

『わたくし、ヘラ・ソラと申します』

ドルとソラか、多分ソラは魔法使い系だな、ドルはわからないな

プラネン

『お前らイークルズだろ？』

ドル

『当たり前だぜ？爆弾やるよ』

ドルは金属の玉を投げて来たのでキャッチする

ドカーン

プラネン

『ギャー！！』

爆発しやがった！！？そうか！だから爆弾か！
とりあえず、腕が飛んでったので拾ってくつつける。

ソラ

『ドル並の馬鹿・・・わたくし、相手にするのいやですわ』

ドル

『臆病なソラは引っ込んでな！俺一人で十分だぜ！』

ドルは更に爆弾を投げて来た、あぶねえな！

カッキーン！

剣で爆弾を打ち返すと

ドカーン

ソラにぶつかり爆発した・・・

ドル

『俺じゃないよ!?!?』

ソラ

『ウッフ・・・わたくし怒っておりますのよ?』

何か怖い・・・物凄く怖い

ドル

『違つよ！俺じゃ・・・』

ソラ

『怒れる神よその心に鉄槌を刻む光は永遠なる者か、雷呪文、
番、サンダー呪文』

ドル
『やめろー!!』

ガラガラー!

雷に打たれたドルは……

ドカーン!!

爆発して飛んで行った……

ソラ

『わたくし、疲れましたわ、後はよろしくお願いします、
魔法』

テレポルト

ソラも居なくなった……俺は何もしてないよ?

ブレイク

『……あの時に比べ強くなったか?』

プラネン

『わからねえよ』

テル

『じゃあさ、相手してあげるよ、ブレイク行くよー』

プラネン

『二対一かよ!』

テル

『大丈夫だよ、手加減してあげるから』

ブレイク

『・・・』

このチビ・・・何かムカつく

プラネン

『こてんぱんにしてやるよ！チビ！』

テル

『チビ言うなー』

テルはブーメランに刃物がくつついた？感じの武器を投げたので避けるとブーメランはテルの手元に戻ってくる

テル

『やるじゃん、ブレイクもねー』

ブレイクはでかい剣を構え、振り下ろす

後ろに飛びのくと後ろからテルのブーメランが飛んでくる

グサツ！

肩を浅く切った、これくらいならすぐに再生するから問題ない

プラネン

『ウェイブ剣技』

衝撃波をテルに放つが、

速いな！テルは足が速いようで走って避ける

テル

『私にはあたららないよ！』

プラネン

『チツ！剣技（二連撃）』

今度はブレイクに向かって攻撃するが・・・幅の広いブレイクの剣で止められる

テル

『アハハ？後ろだよ』

後ろからブーメランが飛んでくる

プラネン

『調和術（孤独の恐怖による破壊への対立心）調和術（憎む人間の対立心）』

まずは破壊を拒否してブーメランを弾く、その後他人を拒否してブレイクを吹っ飛ばすが

ブレイクはすぐに復帰したようだ

だがブーメランは弾いたからテルは戦力外・・・だよな？

テル

『まだまだなんだよね！』

テルはブレイクの剣の上に立ち、ブレイクはその剣を振るいテルを

打ち出した!?

プラネン

『へ!?!』

テル

『キーツク!』

プラネン

『ぐふつ……』

打ち出されたテルはそのままキーツクを繰り出し、空中前転をして見事に着地

プラネン

『いてえ……』

テル

『凄いでしょ!』

プラネン

『……ブラックハード闇魔法』

ムカつくテルに向けブラックハードを放つ

テルはブレイクの後ろに隠れブレイクは剣でブラックハードを防いでいる

テル

『いつくよー』

テルはブレイクの後ろからジャンプして俺の頭を足蹴りしその反動で空中高く飛び上がる

ブラネン

『いてえ・・・』

集中が切れてブラックハードも消えたためブレイクは剣を地面に置き、落ちてきたテルをキャッチする

ブレイク

『・・・諦める』

ブレイクは一言話すとテルを抱いたままどっかに行ってしまった

ードウスルノ？

決まってるだろ！とりあえず風車にいくぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9302x/>

ミラーワールド 真実を探す対立心

2012年1月15日02時01分発行